



AJI 研究者エッセイ
シリーズ 1



アジアと日本 ことばの旅

竹田 敏之・向 静静 編

AJI 研究者エッセイシリーズ 1

アジアと日本 ことばの旅

竹田 敏之・向 静静 編

立命館大学
アジア・日本研究所

ISBN 978-4-910550-12-1 (Online)

ISBN 978-4-910550-13-8 (Print)

アジアと日本 ことばの旅

立命館大学アジア・日本研究所
立命館大学大阪いばらきキャンパス
〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150
Email: aji-eb@st.ritsumeikan.ac.jp

目次

序文	
小杉 泰	iv
編者まえがき	
竹田 敏之・向 静静	vi
「漢方」をめぐるあれこれ (日本／中国、日本語／中国語)	
向 静静	1
日本留学の経験 (日本、日本語)	
李 眞恵	9
ブータンのスジャとンガジャ (ブータン、ゾンカ語)	
宮本 万里	15
「カナ カヌ バヨ (ごはん、食べましたか) ?」: 挨拶から感じるネパールの食文化 (ネパール、ネパール語)	
伊東 さなえ	21
ルンがそよぐとき (インド、チベット語／モンパ語)	
長岡 慶	27
コリョ・サラムの言葉 (カザフスタン、コリア語)	
李 眞恵	33
ことばの市場 (パキスタン、ウルドゥー語)	
須永 恵美子	39

スターバックスができない国 (イラン、ペルシア語)	
黒田 賢治	45
紅茶しか出ない珈琲屋：コーヒーと紅茶のペルシア文化史 (イラン、ペルシア語)	
黒田 賢治	51
「溜めているか？」 (イエメン、アラビア語)	
馬場 多聞	57
シンキーティー知識人を求めて：知の薫りに魅せられて (湾岸諸国、アラビア語)	
竹田 敏之	63
コロナ禍で生まれたキャッチフレーズ (インドネシア、インドネシア語)	
足立 真理	73
「ハラル」の味 (マレーシア、マレー語)	
桐原 翠	79

※本文中の写真は、特に断りのない限り、各執筆者による撮影です。

序文

立命館大学アジア・日本研究所が刊行する **AJI Books** は、これまで主として英語で刊行され、学術的な研究集会などをベースとして、最新の知見を皆さまにご報告する役割を担ってきました。

このたび、**AJI Books** 中のシリーズとして、「研究者エッセイ」というカテゴリーを新規にスタートいたします。このシリーズは、日本語で刊行して、広く一般読者の皆さまにもお届けしたいと思います。書き手は留学生を経て日本で研究者となった方（日本以外の出身者）も含まれますが、全員が、日本語で執筆しています。表紙も、**AJI Books** に親しみのある皆さまがすぐにお気づきになったように、これまでとはデザインを変えました。

学術的な報告とは別に、「研究者エッセイ」というカテゴリーを創設したのは、学術的な研究やフィールドワークを基礎としながらも、やわらかい書き物を通して、一般読者の皆さまにアジアや日本についてお知らせするという役割を開拓したかったからです。

大学附置の研究所はどこでも、学知の開発、社会的価値の創造に全力をあげており、そうした学術的な知見をわかりやすく社会に発信する役割は、主として、商業出版社の新書などに託されています。しかし、デジタル化時代が進み、情報発信の方法が多様化するなかで、大学の研究所でもさまざまな媒体を開発すべきという思いが強まり、学術と気軽な読み物の合わせ技として本エッセイ・シリーズを始めることとなりました。

どうぞ、この新しい「研究者エッセイ」シリーズを、他の研究所の刊行物と同様に、応援してください。皆さまの忌憚ないご鞭撻とご支援を心より願います次第です。

2025 年 5 月

小杉 泰

立命館大学アジア・日本研究所 所長

編者まえがき

研究者エッセイ・シリーズの第一弾として、『アジアと日本 ことばの旅』をお届けします。立命館大学アジア・日本研究所が企画・編集を担当し、若手研究者を中心とする執筆陣によって書かれています。

アジア・日本研究所は、全学横断型の研究所として、学内の人文社会系および自然科学系にわたる多様な専門分野の教員や若手研究者の参画を得ながら、学際的な研究を推進してきました。また、他の大学や研究機関で活躍されているアジアに関わる研究者の方々にもご協力いただき、広がりのある共同研究の場として、日々その歩みを進めています。

本書に収められた連載は、こうした研究者の皆さんによって執筆され、2024年9月より当研究所のホームページにて連載を開始しました。掲載が進むにつれ、「独自の視点と専門性を活かしたエッセイ群がたいへん興味深く、読んでいておもしろい」とのご感想やご好評を各方面からいただき、このたび書籍として刊行する運びとなった次第です。

本書の特徴の一つは、「アジア」という語に広がりをもたせていることです。日本では一般的にインド以東が想起されるアジアですが、ここでは中東・アラブを含む西アジアや中央アジアを含めた「アジア全域」を射程に収め、そこに息づく多様な言語と文化に焦点を当てました。

私たち編者の竹田敏之と向静静は、アジアの西と東、それぞれの極に位置する地域を専門としており、竹田はアラビア語圏を中心とする地域研究、向は漢字文化圏を対象とした医学思想史・医食文化を専門としています。現在は、アジア・日本研究所を拠点に、ことばや医学交流史をめぐる国際的かつ学際的な研究を展開しています。

私たち二人が共同でこの企画に取り組んだ背景には、「国際語」という視点があります。今日、「国連公用語」と言えば、まずは英語やフランス語が想起されがちですが、1945年の国連創設当初には英語・フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語の5言語が公用語とされました（1946年国連総会決議）。その後、1973年にアラビア語が加えられ、現在の6言語体制が整いました。追加の背景には、国際的影響

力、広域性、そして話者数の規模が関係しています。

本書の構想も、中国語とアラビア語という「アジア言語」が国連公用語として認められているという事実に着想を得ています。この視点を起点として、各地のことばと文化を描く本書のような試みは、先行の書籍には見られない新しいものだと考えています。

連載においては、東アジアからスタートし、南アジア、西アジア、そして再び東南アジアへと向かう実際の「旅」のような構成を意識しました。現地の風景をことばとともに思い描きながら、お読みいただければ幸いです。今回は柔らかい筆致に加え、各執筆者が臨地調査や滞在を通じて撮影した写真を多数掲載しています。それらは単なる旅の記録ではなく、研究者・フィールドワーカーとしての眼差しから切り取られた貴重な「絵」としての意味をもちます。

以下に、各エッセイの概要を簡単にご紹介します。

向静静は、「漢方」という言葉の誕生と展開を通して、日本語と中国語における医学関連語の創出、そして東アジアにおける医学文化の交流と循環を描きました。

李真恵先生は、日本語習得と日本での生活適応の過程で経験した言語の壁や文化的違い、そしてその克服に向けた努力とコミュニケーションの秘訣について綴っています。

宮本万里先生は、ブータンの茶文化を取り上げ、特に塩バター茶「スジャ」や甘いミルクティー「ンガジャ」を通して、ゾンカ語とともにその地域の食習慣や文化的背景を探求しています。

伊東さなえ先生は、「カナ カヌ バヨ（ごはん、食べましたか）」というネパール語の挨拶を手がかりに、ネパール人の食と生活に根ざした優しさと人間関係の在り方を描き出しています。

長岡慶氏は、インド北東部に暮らすモンパの人々を対象に、チベット語やモンパ語における「ルン（風・息・気）」が祈りや癒し、噂などを運ぶ力としてどのように経験されているかを探りました。

李真恵先生は先のエッセイに続き、カザフスタンに暮らすコリョ・サラムの言語状況に焦点をあて、特にロシア語を母語とする同話者の言語変容や韓国語の使用状況、世代ごとの言語変化について考察しま

した。

須永恵美子先生は、パキスタンの書店街「ウルドゥー・バザール」を通して、ウルドゥー語が織りなす都市の風景と、ことばが生きる場所の豊かな息づかいを描いています。

黒田賢治先生は、2本のエッセイを通じて、イランに根づくカフェ文化の歴史と現在を、ペルシア語を手がかりに紹介しています。ペルシア語の響きに耳を澄ませつつ、イランという社会とその風景を味わい深く浮かび上がらせています。

馬場多聞先生は、アラビア語イエメン方言の挨拶句「溜めているか？」を切り口に、イエメンに根づく嗜好品の一つであるカートをめぐる文化と社会の姿を描き出しました。

竹田敏之は、湾岸諸国におけるモーリタニア出自の「シンキーティー知識人」の知的活動をたどり、アラビア語学を中心とする彼らの学問的貢献が現代アラブ社会にいかに息づいているかを探っています。

足立真理氏は、コロナ禍のインドネシアで生まれた標語やキャッチフレーズを素材として、インドネシア語における外来語の受容と社会・信仰との関係を読み解いています。

桐原翠先生は、マレーシアの多民族社会における食の実践から、マレー語で語られる「ハラル」という概念の奥行きを掘り下げて綴っています。

以上、このような多彩なラインナップで構成されています。現地の風景や人々の息づかいを生き生きと感じながら、アジアを舞台とした「ことばの旅」をお楽しみいただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、研究所の編集制作室の岡本多平氏、伊藤桃子氏には貴重なご助言をいただきました。出版までの工程管理はもとより、私たちでは気づきにくい細部に至るまで、きめ細やかな作業で支えてくださいました。日頃からのご支援に、心より感謝申し上げます。

また、本研究者エッセイ・シリーズの企画から出版に至るまで、多大なご指導をくださったアジア・日本研究所所長・小杉泰教授に深

く感謝申し上げます。

読者の皆様には、ぜひご意見やご感想をお寄せいただければ幸いです。今後の研究者エッセイ・シリーズにもご期待ください。

竹田 敏之
向 静静

「漢方」をめぐるあれこれ

(日本／中国、日本語／中国語)

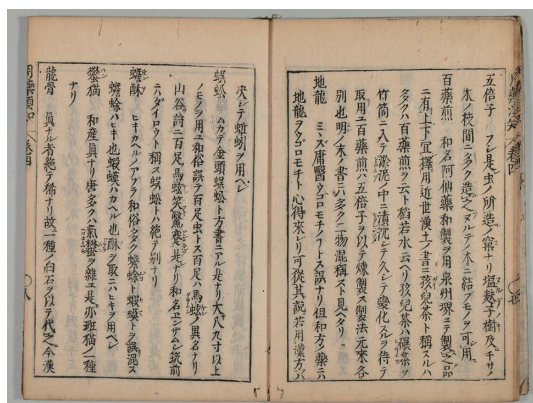
向静静

(立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 准教授)

「漢方」の造語について

漢方医学と言え、中国医学のことだと思う人が多いだろう。しかし、実はそれは日本化された中国医学を意味している。そもそも、「漢方医学」という言葉自体が和製漢語、つまり日本でできた漢語なのだ。ちなみに、中国では、自国の医学を「中国医学」(略して「中医学」「中医」と呼ぶ。「漢方」という言葉を分解してみると、「漢」は中国、「方」は手段・技術・方法を意味する。つまりは、中国における医学のことを日本から見て呼んだ言葉が「漢方」なのである。

それではこの言葉はいつから使われているのだろうか。「漢方」の初出は1726年である(長野・関屋, 2023)。江戸中期の本草学者である松岡恕庵(1668～1746)は、日本の薬名・薬物と中国由来のものを区別するために「漢方」を造語した。「漢方」



松岡恕庵『用薬須知』に「漢方」が記載されている部分(京都大学貴重資料デジタルアーカイブより)

は中国から伝来した処方指し、対照的に「和方」は日本独自の処方

を指す。

松岡恕庵が活躍していた時代は、享保の改革で知られる八代将軍・徳川吉宗の治世である。この時期、日本では天然痘をはじめとする疫病の流行、飢餓問題が深刻化し、また中国や李氏朝鮮から薬物などが輸入されたことから、金貨の流出といった経済的な問題も起きていた。有名な小石川養生所の開設をはじめ、薬物国産化の実施、中国人医師の日本への招聘、採薬使の任命、医書の出版・普及といった政策は、こうした時代状況を背景としていた。

こうした吉宗による医療政策のなかで、1721年から薬品鑑定に従事していたのが松岡である。薬物の国産化がいわば国策として進められるなか、彼は日本産・中国産の区分を強く意識していたであろう。そのなかで生み出されたのが「漢方」という言葉だったのである。

ちなみに、長寿や万病に効くといわれる朝鮮人参（高麗人参、薬用人参）の国産化が実現したのも、吉宗による改革政策の成果である。筆者が、本学の教養科目「日本史」の授業で吉宗の享保改革の医療政策について話したところ、吉宗といえば時代劇で見えるような「暴れん坊将軍」のイメージしかなかったため、彼が日本の医療に尽力していたことにとても驚いたというコメントをいただいた。

「東洋医学」と「漢方」

ところで、東アジア圏の医学と言えば、「東洋医学」という言葉もよく耳にする。この言葉は明治の半ば頃から使われるようになった(小曾戸, 2014)。広義には東洋諸地域の伝統医学を指し、具体的にはイスラーム文化圏のユナニー医学、東アジア漢字文化圏の中国医学、インドのアーユルヴェーダ医学、そしてチベット伝統医学が含まれる。狭義には、日本の漢方医学を指す場合が多いが、鍼灸治療と漢方医学を総称することもある。

一方で、現在中国で広く使われている「中医」という語は、「中国伝統医学」や「中国伝統医学の医師」の略称である。この言葉が現在の意味で用いられ始めたのは、1857年に上海で刊行されたホブソンの著作『西医略論』であったとされている（朱, 2017）。ホブソンはロンドン伝道会の医療宣教師である。それ以前にも「中医」という語はあったが、それは必ずしも「中国の医学」という意味ではなく、「中くらいの医者（医術）」を指す場合も含まれていた。これに対して、ホブソンは「西医」（西洋医学）との対比で「中医」の語を使用した。『西医略論』は中国の医師たちの間で広く読まれ、その後「中医」は西洋医学の対比語として、民間や政府の間で多く使われるようになった。

やがて「中医」の語は法律上にも使われるようになる。1936年1月22日に国民党政府の命令に基づき公布された「中医条例」がそれである（朱, 2017）。この規則は、1930年に公布された西洋医学に関する規則「西医条例」に対応しており、伝統医学における法的名称を正式に確立した。なお、西洋医学の導入などを受けて、1920～40年代の中国では自国の医学を特に「国医」と呼んだ時期もあった。「国医」という言葉は、古代中国では宮廷医家を指す語として使われていたが、これを自国の医学という意味で使ったのは、清末民初の学者・思想家である章炳麟（1869～1936）が最初で、彼が1923年に発表した文章からだという（朱, 2017）。章は中国の伝統文化思想をナショナリズムに基づいて論じたことから「国学大師」とも称されており、「国医」という言葉も「中医」を賛美するために使われていたことが分かる。

さらに、韓国の伝統医学は現在「韓医学」または「東医学」と呼ばれ、漢方医学と同様に中国医学に基づきながら、朝鮮半島で独自に発展した医学である。朝鮮植民地時代（1910～1945）には「漢方医学」と呼ばれていたが、戦後は「韓方医学」に改められ、1986年には「韓医学」という名称が広く使われるようになった。

こうした言葉の変遷を見ていくと、東アジアの伝統医学を指す言葉

が、歴史、経済、国際関係などさまざまな要素と密接に関連しながら展開してきたことがうかがえるだろう。

漢方医学の特徴

さて、話を日本の漢方医学に戻そう。漢方医学は、漢・唐代の医学、特に後漢の張仲景（2世紀後半～3世紀初め頃）の医書に多大な影響を受けている。現在でも、日本の漢方製薬会社による製品の多くは、彼による2つの著作『傷寒論』と『傷寒雜病論』に基づく処方で作られており、その数は実に医療保険が適用される漢方製剤147処方のうち約半数にあたる70処方に当たる。

張仲景の著作は、その言葉遣いや文章が簡潔で思弁的な理論が少なく、方剤と病証の緊密な結合（「方証相對」）を論じた点に特徴があった。こうした特徴は江戸時代の日本の医家たちに高く評価され、注釈や考証が盛んに行われた。その影響は現代の漢方医学にも色濃く引き継がれている。



『古方便覧』に掲載されている腹診用の腹証図（京都大学貴重資料デジタルアーカイブより）

それに対して現代の中国医学では、張仲景の医学をはじめとする漢・唐代の医学だけでなく、明清時代の医家が著した医学書も重要視されている。例えば、明代の張景岳（1563～1640）の『景岳全書』や、清代の吳鞠通（18世紀後半～19世紀前

半)の『温病条弁』などが挙げられる。また、中国医学は脈診(手首の脈に触れる診断法)を重視し、漢方医学は腹診(腹を触る診察法)を特に重視する。腹診は中国古典医書にも見られる方法だが、時代が進むにつれて中国では行われなくなる一方、江戸時代の後世派、古方派と呼ばれる医家たちに重視されるようになった。特に、古方派の医家である吉益東洞(1702～1773)は、日本にける腹診の普及に大きな役割を果たした人物である(向, 2023)。

このように同じ中国医学に由来していても、その後の展開によって様々な違いも生じた。例えば、中国医学と漢方医学で使用される薬物は、すべて植物、動物、鉱物といった自然界の産物だという点で共通している。しかし、漢方医学ではエキス剤が主流であるのに対し、中国医学では丸剤や煎じ薬など、さまざまな形態の薬が使用されている。

「漢方医学」「漢方」の逆輸入



台北・迪化街の「思菓埕漢方食舗」の前に
展示されているお茶の材料サンプル(2025
年3月16日)

一方「漢方」は、日本だけでなく中国大陆や台湾にも逆輸入され、これらの地域でも広く使用されるようになっていく。ただし、中国における「漢方」には、日本の漢方医学を指す場合とは異なる意味も含まれている。例えば、中国には「漢方薬草茶」というハーブ茶に似たお茶がある。ここでは「漢方」という言葉が日常的な養生や病気予防のた

めに飲むお茶の意味で使われている。さらに、台北の迪化街には「思菓埕漢方食舗」という店があり、そこでは菊の花、バラの花、ナツメ、クコの実などを使用したお茶やミルクティーが提供される。このように台湾でも「漢方」という言葉は薬草茶を指し、養生という意味が含まれている。



台北西昌街の「四知青草店」の前に並んでいる薬草茶の材料（2025年3月14日）

中国大陸や台湾では古くから薬草を使って料理やお茶を作る習慣があり、伝統的な養生法の一部として根付いている。特にコロナ禍以降、健康意識が高まり、若者の間でもこうした養生ブームが広がっている。これに伴い、「漢方」とい

う言葉は、今後ますます薬草茶や日常的な健康管理を指す意味で使われるようになるだろう。

「漢方」という言葉の逆輸入に象徴されるように、近現代の中国医学は日本の漢方医学から多くの影響を受けている。近代中国の医家・陳存仁（1908～1990）は、日本で93種類の漢方医学書を収集し、それを『皇漢医学叢書』（1936）として中国で出版した。この叢書には、近世日本の医家による書籍が多数収められており、それらは近代中国の医家に大きな影響を与えた。

一方、日本の漢方医学は古代中国の医学を模範としつつ、独自の発展を遂げてきた。また、日本から影響を受けた現代の東アジア各国における「漢方」も、それぞれが独自の特徴を持つようになっている。

「漢方医学」や「漢方」という言葉を整理すると、東アジアの伝統医学はお互いに影響を与え合いながら、それぞれの地域で個性豊かな医薬文化を築いてきたことがはっきりとわかる。こうした影響の循環は、東アジアの漢字文化圏で医書を通じた知識の交流が可能であったことから生まれたのである。

参考文献

- 小曾戸洋 (2014) 『漢方の歴史』 大修館書店.
向静静 (2023) 『医学と儒学：近世東アジアの医の交流』 人文書院.
長野仁・関屋成彰 (2023) 「和製漢語「漢方」の生成と変遷」『漢方の臨床』第70巻第10号, 27～42頁
朱建平 (2017) 「“中医”名実源流考略」『中華中医薬雑誌』第32巻第7期, 3043～3047頁.

〈プロフィール〉

向静静 (こう・せいせい)

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構
准教授。専門は江戸時代の医学思想史、
日中医学交流史。最近は「薬膳」や「医
食同源」といった食と健康をめぐる思想
も研究している。最近の著書論文に『医
学と儒学：近世東アジアの医の交流』(人
文書院、2023年。第36回矢数医史学賞、
第18回立命館白川静記念東洋文字文化
賞奨励賞など受賞)、Jingjing XIANG and
Nara ODA eds., *Asian Medicine: Tradition and Innovation* (Asia-Japan
Research Institute, Ritsumeikan University, 2023)、「近世日本における



『傷寒論』と漢方医学：麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪の治療から」（『立命館アジア・日本研究学術年報』第3号、2022年）などがある。

日本留学の経験 (日本、日本語)

いじんへ
李眞恵

(立命館大学 衣笠総合研究機構 研究教員・助教)

毎年春になると、来日してからの年月を数える。2023 年の春、10 年目を迎えた。研究生を経て京都大学で博士課程を始めた。普通の学生なら研究に集中するだけでも他の余裕はないはずだった。それに比べて留学生であった私は、一日も早く日本語を習熟させるとともに日本生活に適応しなければならなかった。つまり、毎日の大小のカルチャーショックを消化しなければならなかった。そのため、できるだけたくさん話せて日本文化が直接に経験できる環境に自分を露出させることが最善だと思っていた。それで選択した方法がアルバイトであった。

これまでアルバイトの経験が皆無だったにもかかわらず、アルバイトを選んだ私は相当冒険的だったようだ。確かに、少し遅い年齢に留学をするということ自体が冒険だったのかもしれない。しかし、言葉がまだ下手な外国人をどこでも簡単に雇用してくれるはずがなく、ありがたくも初めて私を雇用してくれた某カフェでサー빙グをすることになった。

留学に来る前に時々日本語を勉強し、特に会話の時間には誰よりも一生懸命に取り組んできた。しかし、それはあくまで理論に過ぎず、実際はかなり違っていた。しかも関西の方言と直接的に話さない京都地域の表現方式、それでいわゆる空気を読んで意図に気づかなければならないというのは、私にはとても難しいことだった。実は、依然として難しい。

日本語と出会って

高校と大学時代に日本語会話を学んだ。会話とはいえ「です・ます」調を基に動詞を変形する方式が中心だったと記憶している。疑問形には必ず「か」をつけて文章を作った。練習し、テストではそれらをどれだけ自由自在に使えるかによって点数が決められた。

しかし、実際に日本に来て人々と対話してみると、疑問形の文章であっても平書形で最後だけピッチを上げて、あるいはそのようなニュアンスを与えて駆使するが多かった。すなわち多くの場合、「です・ます」形に疑問の終助詞「か」を付けなくても疑問形文章として使われていた。そして、必ずしも動詞を「です・ます」調だけで使用するのではなく、動詞の基本形そのままを疑問形文章では終わりを上げたりニュアンスを与えたり、意志形文章では終わりを下げたり、似たニュアンスを与えたりして使用していた。そして基本形動詞に接尾辞「～よ」「～の」「～のよ」「～わ」などを付け、様々な文脈で様々な意味で使用していた。



マンションから大学まで行くたびに必ず通った鴨川
(2017年12月22日)

多様で定型化が難しいためだろうか。授業時間中には聞き逃したのかもしれないが、韓国で習った時には知らなかったことである。当時の私はアルバイトで触れる多様な表現を状況と脈略とともに思い出しながら覚えようとした。対話上、様々なニュアンスによって使われている接尾辞を違和感なく自由自在に駆使したかったから。それはまだ夢として残っている。

関西方言はもう一つの課題であった。特有のアクセントはその時も今も相変わらず懐かしいが、問題は、略して話したり、「～やん」「～へん」「～やんか」「～へんか」「～やんな」などの接尾辞がついた文章がなかなか理解できないことであった。

アルバイトの当時には、サービングは接客が重要だったために、どうしてもお客さんには聞き返すことができず、お客さんの要請を、聞こえたままに覚えて社員に聞き返して理解した。社員たちの言葉が理解できなかった時には、忙しい時間を避けて再び尋ね、その内容を書き取った。そのメモを繰り返し見ながら記憶するために努力した。考えてみると、言葉がよく通じない外国人と一緒に仕事することは、非常に面倒なことかもしれない。にもかかわらず、とてもありがたいことに当時の社員らは字や文章を直接書いて詳しく説明もしてくれるなど、親切に教えてくれた。ただ、その説明も関西方言だったために、かえって難しかった時もあったのだが。そのように、アルバイトをしながら少しずつ自信がつき始めた。

同じ漢字文化圏の言語でも……

韓国では文字を漢字で表記はしないが、漢字の音読をハングルで表記する、いわば漢字文化圏である。中学校・高等学校課程では、学校の裁量によって漢字を選択または必須科目として採択している。純粋なハングルで構成された単語や合成語が多数存在するが、漢字を学ん

でおけば読解力と文解力に大いに役立つのが事実である。私も中学生の時から週1時間、漢字を習った。韓国語には日本語と音読の発音が似ている単語が多い。例えば「家族（ハングルでは、gajok）」、「地域（jiyok）」、「保護者（bohoja）」、「道路（doro）」など。発音が似ているため、両言語の言葉を混同して口にする場合も少なくない。例えば、「kazoku」を「gajok」などに。日本語駆使時、韓国人がよく犯すミスである。

しかし最も慣れがたいのは直接的に話さない文化だった。実は今も難しい。日本人の友達は日本人でも難しい部分だと励ましてくれるが、外国人が肌で感じているほどではないのではないかな。当然だろうが、日本で生まれたり、幼い頃に移住した韓国系日本人にも感じる特徴でもあるようだ。大学で会った人たちの中で、時間があれば一緒にお茶とかランチをしようと誘う人たちに、「いつがいいか」とすぐに聞き返して、彼らを当惑させたこと、アルバイトをしていた時に、最初は、意図が分からずに指示の通りだけにしたことが、時間を経るごとに少しずつようやくその意図が読み取れたことなどなど。

今でも、相手の言葉が本音なのか建て前なのか、さっぱり分からず、どう反応するといいいのか、もしかしたら失礼になるかもしれないと、悩むことが多い。

もちろん、空気を読む能力が依然として足りない自らのせいにするのが先だろうが。お互いのニュアンスを読み取ること、ひいてはお互いのニュアンスを理解しようとする努力はコミュニケーションにおいて最も重要なのではないかと思う。これから来日20年になるとときにはもっと成長したい。

次回は、私の専門であるカザフスタンの高麗人（コリョ・サラム）のことばについて紹介したい。

（2024年11月8日記）

〈プロフィール〉

李 眞恵 (い・じんへ)

立命館大学衣笠総合研究機構研究教員・助教。地域研究博士（京都大学）。専門は、中央アジア地域研究、コリアン・ディアスポラ研究、高麗人（コリョ・サラム）研究。最近の単著及び論文に、『二つのアジアを生きる：現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人（コリョ・サラム）ディアスポラの文化変容』（ナカニシヤ出版、2022年）、



“The Contemporary Status of the Ethnic Group in Kazakhstan and the Koryoin’s Nation” (*Asia Review* 11(1): 261–289, 2021), “Why do Diaspora Re-Emigrate to their Historical “Homelands”? A Case Study of Koryo Saram’s “Return” from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea” (*Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* 5: 51–65, 2023) など。

ブータンのスジャとンガジャ (ブータン、ゾンカ語)

宮本万里
(慶應義塾大学商学部 教授)

塩味のお茶

ブータンの人たちは茶をよく飲む。牧畜が盛んであった西ブータンでは、客が来たらたっぷりのバターが入ったスジャ (su ja) と呼ばれる茶を出す。これは一般に塩バター茶とも言われ、モンゴル地方やチベット、ウイグル自治区、さらにヒマラヤ北部などで飲まれてきた。穀物や野菜の栽培が困難で家畜に依存するこれらの寒冷高地では、茶は古くからビタミンやミネラルを補給するために不可欠な食材であり、中国との間の主要な交易品であったことが知られている。ブータンに入る茶は長らくチベットの市場を経由したものであったが、1959年にチベットとの国境を封鎖して以降は徐々にインド在住のチベット系コミュニティ等を経由して入手するようになっていったようだ。

茶葉は黒茶の一種を押し固めたもので、ブータンでは三角形に固めたものをジャリ (ja ri)、板状に固めた物をジャバグチュ (ja bagchu) と呼ぶ。この茶葉を煮出してバターと塩を加え攪拌したものが塩バター茶であり、ブータンの国語ゾンカでは「攪拌／攪乳する (su) 茶 (ja)」という意味になる。

おもてなしのお茶

20年ほど前、筆者がブータンでフィールドワークを始めた頃、初めて訪れたフィールドの一つがポブジカ谷と呼ばれる湿原の村であっ

た。村の話聞くために訪れた家々では、必ずこのバター茶が出された。攪拌されて乳化したバターが漂う大ぶりのマグカップを傾けると、その下にはグレーがかった濃い桃色の液体が見える。恐る恐る口を近づけると、バターの香りと塩味が感じられほんのりとプーアール茶のようなお茶の香りがする。お茶というよりもスープといった趣きだ。数口飲んだ後、インタビューに取り掛かる。10分ほどメモをとりながら聞き取りをして、再度カップに口をつけると、さっきまで液体であったものは固体に変化していた。表面に浮いていたバターが冷えて固まったのだ。試しに指先で厚いバターの膜を突き破るとようやく温かさを残す液体に辿り着いた。



訪問した村の居間で出されたスジャ。上級のお客には陶器の茶碗。普段はプラスチックのマグカップ。昔は皆自分用の木椀を一つ着物の胸元に潜ませていたが、今ではもち歩く者はほとんどいない。

このように表面が固形化するほどのバターを使えるのは、ヤクやウシの牧畜が盛んで乳製品が十分に取れる地域の証でもある。バターは調理にも使う日用品であるが、家畜の少ない世帯の人々にとっては贅沢品でもあり、あのスジャの戸惑うほどの量のバターは、家主の気前の良さを示すものでもあったのだった。

その後の調査で滞在したブムタン県の村の家では、毎朝滞在した家の主人がジャスム(ja sum)と呼ばれる大筒様の道具でバター茶を攪拌する音で目が覚めた。湯を沸かし、スジャを作ることは朝の最初の仕事な

のである。農繁期の村では、昼食にはしっかりと米とおかずを食べるが、早朝にはスジャに生米を浸水後に空炒りして作るザオを一掴み入れて食べ、畑に向かうことが多い。大きなジャスムで作った大量のスジャは、大ぶりのアルミホイル製の蓋付きポットに移し替えられてストーブの上などに置かれ、客のカップに茶を注ぐ前に主人は必ずポットを前後に少しゆすり、バターが分離しないよう配慮する。多めに作ったスジャは中国製の大きな魔法瓶で保存された。



ジャスムでスジャを作る村の女性。円盤
つきの棒を上下させて液体を攪拌する。

スジャは仏教僧院の日課においても不可欠な要素であり、早朝のスジャの後も、修養の合間の小休憩には、大きな蓋付きポットを持った僧侶が一行ごとに仲間の僧侶たちに茶汲みをして回る風景を見ることが出来る。村落の家や寺で行われる儀礼においても、読経の合間に僧侶たちに茶を供することは施主の義務となっている。

中央アジアの牧畜社会では、人々は日に十数杯もの塩バター茶を飲んでいたらとされ、茶はビタミン摂取などの観点

からも不可欠な役割を果たしてきた。そのため茶の供給源である中国との茶交易の停止は死活問題に発展した。中国側の記録では、茶葉は、モンゴルやチベットの馬と交換した時期には「馬茶」と呼ばれたほか、辺境のための「辺茶」、チベット（西藏）のための「蔵茶」など、時代によって様々な呼び名が当てられていたようである。そして中国の

歴代皇帝たちは茶葉の供給量を調節することで、チベットに対する政治的な影響力を維持し続けたという説もある。



村寺の台所。囲炉裏で保温されるスジャの入った蓋付きポットと
ンガジャの入った鍋。僧侶たちの休憩時間に合わせて提供される。

他方、国内で米や小麦、野菜等の栽培ができるブータンでは、スジャは比較的補助的な食材であったとも言えそうだが、それでも茶が人々の生活に不可欠であることは他の地域と変わりがない。村の中を歩いていると誰かが必ず「茶を飲んでいけ」と声をかけてくるような歓待の文化とスジャは切っても切り離せないものなのである。

甘いお茶も好き？

チベットの政情が不安定化した1959年以降、ブータンはインドとの連携を強めていったが、その際に茶飲み文化にも大きな変化が起こっている。南アジアを席卷するアムール印やNestle印のミルクパウダーとタージ・マハル印の紅茶と砂糖が、どんな小さな村の売店にも売られるようになっていき、ンガジャ (nga ja) と呼ばれる甘いミルクティーを飲む習慣が広がっていったのである。nga とは甘味をさ

しており、ンガジャとはつまり「甘いお茶」という意味になる。毎食、必ず唐辛子を大量に使って食事を作るブータン人の伝統的な食生活において、「甘い」食べ物はほとんど存在してこなかった。だからこそ「甘いお茶」はミルクティーただ一つを指すものとなったのだろう。



牧畜小屋の囲炉裏端。ヤクのミルクを使ってンガジャを作る牧畜民の女性。

ブータンでも核家族化が進み世帯の規模が小さくなっている近年、家庭で作る茶の量は以前ほど膨大ではなくなっており、早朝にスジャを攪拌する巨大なジャスムの音で目を覚ますことは稀である。スジャは台所のミキサーで少量作れば十分であり、こうした生活スタイルの変化は、小鍋で作るンガジャの浸透にも貢献しただろう。調査で訪ねた山奥の村で老婆が「砂糖も買えない（から茶も出せない）」と呟いた20年前に比べ、砂糖が贅沢品であると考える者はもう少ない。

これら2種類のジャ（茶）に対する現在の人々の好みは、出身地や家庭の生活習慣のほか、食事時か喫茶時かなど状況によるところも大きいようにみえる。しかし、外国人やミルクティー好きのインド人に

対するもてなしの場面では「ジャは？ スジャかね？ ンガジャかね？」などと聞かれない限り、自動的にンガジャが出てくる。これは、もちろん経験的に得た知識でもあるだろうが、既製食品（缶詰のスープや豆など）に旅行者の食の安全を依存していた以前の官製観光時代の名残もあるだろうと愚推する。自家製バターと（あまり洗われることのない）ジャスムを使った本場のスジャの野生味は、慣れるまでに少し時間がかかるのだ。

(2025 年 2 月 4 日)

〈プロフィール〉

宮本万里（みやもと・まり）

慶應義塾大学商学部教授。専門は、政治人類学、環境人類学、ブータン及び北東インド等南アジア地域研究。主な著書論文に、『自然保護をめぐる文化の政治：ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策』（風響社、2009 年）、「剥き出しの屠りと匿名的な屠畜者たち：現代ブータンにみる屠畜規制と拡大する放生実践」田中雅一他編『インド・剥き出しの世界』（春風社、2021 年）、

「ネップ関係からみるブータンの高地牧畜民社会とその変容：北部国防衛と定住化の狭間で」『地域研究』20 巻 1 号（2020 年）、「Animal Slaughter and Religious Nationalism in Bhutan” in *Asian Ethnology*, vol.80, no.1 (2021) など。



「カナ カヌ バヨ（ごはん、食べましたか？）」： 挨拶から感じるネパールの食文化 （ネパール、ネパール語）

伊東さなえ
（大阪大学大学院人間科学研究科 講師）

「ナマステ」より「カナ カヌ バヨ」？

ネパールでフィールドワークをしていると、しばしば「日本語を教えて欲しい」と言われる。しかし、「いいですよ、なにが知りたいですか？」と尋ねたときに、「じゃあ、『カナ カヌ バヨ？』は日本語でなんて言うのか？」と聞かれると答えに詰まってしまう。逐語的に訳すなら、「カナ」は食事のことであり、「カヌ バヨ」というのは「食べましたか？」、つまり「ごはん、食べましたか？」ということになる。ただし、この言葉を教えてほしい、と言ったネパール語話者は、おそらく、日本語に翻訳すると挨拶とは捉えがたいこのフレーズを挨拶として使うつもりなのだ。

ガイドブックなどでは、日本語の「こんにちは」にあたる言葉として「ナマステ」が紹介されていることもあるが、「ナマステ」はもともと、非常に格式ばった宗教的な言葉である。現代では、ネパールの人々もカジュアルな挨拶として「ナマステ」を使うようになってきているが、それでも、人によっては、こちらが「ナマステ」と挨拶をすると、両手を合わせ、丁寧に「ナマステ」と返してくれる。では、格式ばっていない挨拶は何かというと、その一つが「カナ カヌ バヨ」である。例えば道でばったり会った友達に「オッホー、サヌナニジ！ カナ カヌ バヨ？（あらまあ、サヌナニさん！ ごはん、食べましたか？）」

など、頻繁に使われる。(ほかにも、「サンチャイ フヌフンチャ (元気ですか?)」や「ケ チャ ハル カバール (何かニュースはありますか?)」などもある。)

このような背景があるので、冒頭のように聞かれたときには、『『カナ カヌ バヨ?』は日本語だと『ごはん、食べましたか?』だけど、挨拶として日本人にいきなり言うと言われるかもしれないです』と伝えるようにしている。

なお、先ほど「カナ」を「ごはん」と訳したが、実際には「カナ」は日本語の「ごはん」とは少し異なるニュアンスを持つ言葉である。ここで、フィールドワークを始めたばかりのころの失敗についてお話ししたい。

「かわいそうに、さあ、カナを食べなさい」

インタビューをするために、ある団体を訪問した際、出迎えてくれた団体のメンバーが「ごはん、食べましたか (カナ カヌ バヨ)?」と挨拶をしてくれた。ちょうど昼にさしかかろうかという時間だった。



早朝のお茶とビスケットなどは家の近くの喫茶店で食べることもある

朝ごはんを食べてきたのかを聞かれているものと解釈した私は、「食べました (カエン)」と答えた。すると、「何を食べましたか (ケ カヌ バヨ)?」と聞かれた。そこで、私は意気揚々と、ホテルで食べた朝ごはんのメニュー

の「食パンとスープです」と答えた。

その瞬間、周囲にいた人々が息を飲んで私のほうを見た。そして、皆で集まって何事かを相談し始めた。しばらくすると、その中の一人が、手招きして近くにある彼の家に連れて行ってくれた。家に着くと、彼は妻に「この人にカナを食べさせてやろう」と言った。妻は私に、「かわいそうに、さあ、カナを食べなさい」と言って、炊いた米と豆のスープ、野菜のカレーをふるまってくれた。



ホームステイ先のカナ（炊いた米と豆のスープ、野菜のスパイス炒め）

私の受け答えの何がいけなかったのだろうか。そのことを知るためには、ネパールの一般的な食習慣を説明する必要がある。ネパールの多くの人は、通常、朝起きてすぐ、お茶とビスケットや食パンなどを食べる。そして、大体9時から11時ぐ

らいの間にカナを食べる。ここでいうカナとは、豆のスープ（ダール）と主食（炊いた米（バート）やトウモロコシ粉で作ったそばがき状のものなど）と野菜のカレー、付け合わせなどからなるネパールで一般的な食事のことである。学生や官公庁の職員などはもう少し早い時間に食べている場合もあるが、いずれにせよ、午前にかナを一度食べる。そのあと、13時から15時ぐらいにカジャを食べる。カジャには焼きそばやチャーハン、インスタントラーメン、パンやドーナッツなどが含まれる。ただし、このタイミングでカナを食べることはない。そして、夜、寝る前、19時から21時ごろに再びカナを食べる。



ポピュラーなカジャの一つ、モモ（蒸し餃子）

つまりカナというのはかなり限定的に、豆のスープと主食を組み合わせたものであり、「食パンとスープ」はカナではない。だから、私は、昼になってもまだカナを食べていないかわいそうな外国人と捉えられたのであった。

カナ、欠かすべからず

カナを一日に二度食べることが非常に重要だということが、フィールドワークを続けているうちに実感としてわかってきた。例えば、カナを食べる時間を逸したまま車で長時間移動し、目的地の空港がやっと近づいてきたときのことである。私はできるだけ早い便に乗りたかったので、「申し訳ないけど、このまま空港で降ろしてもらって、あなたはその後カナを食べてもらってもいいですか？」とドライバーに食堂でカナを十分に食べられるぐらいの額のお金を渡した。すると、ドライバーは「あなたはカナをどこで食べるんだ？」と心配そうに言った。そして、空港に着くと、わざわざ車から降りて、近くにいる人に「この人はまだカナを食べていないんだ。この辺りでカナが食べられる店はどこか？」と聞いて回ってくれた。

あるいは、私がいつもホームステイしている家の20代の息子が、外で友達と酒を飲んで夜遅くに帰ってきたとき、彼はおつまみも食べてお腹がいっぱいなのだが、必ず母親は「カナを食べなさい」と言っ

「カナ カヌ バヨ（ごはん、食べましたか）？」
(ネパール、ネパール語)

てカナを食べさせていた。

「カナ カヌ バヨ？」という挨拶は、このようなカナの重要性という背景に基づいて発される。カナを食べたのか、まだ食べていないのかという重要な情報を交換しあい、気遣い合うフレーズなのである。私も最近では、ネパールで人に会ったときや、電話をかけたときに、「カナ カヌ バヨ？」と挨拶することが多い。「食べた」「まだ食べていない、これから食べる」なら良いのだが、昼過ぎに「食べていない」と言われると「まあ、なんてかわいそうに！」という気持ちにもなるようになった。残念ながら、フィールドワーカーである私はカナを相手に食べさせてあげることができないことも多いが、それでも、「どうしよう、大丈夫？ どこかで何か食べようか？」と一緒に悩んだりしている。

(2024 年 12 月 13 日)

〈プロフィール〉

伊東 さなえ（いとう・さなえ）

大阪大学大学院人間科学研究科講師。専門は、南アジア研究、文化人類学。最近の著書論文に『ネパール大震災の民族誌：共同性と市民性が交わる場で災害に対応する』（ナカニシヤ出版、2024年）、「コミュニティ・レジリエンスが発揮される空間：ネパール2015年地震で被災した都市近郊農村を事例として」『環境社会学研究』29（2023年）、*The Production of Locality through Debris*



and a Festival: Aftermath of the Gorkha Earthquake in the Kathmandu Valley, Studies in Nepali History and Society 25, no. 2 (2020) など。

ルンがそよぐとき (インド、チベット語／モンパ語)

長岡慶

(日本学術振興会特別研究員・東京大学)

風や息、気を意味するルン

インド北東部のタワン県（アルナーチャル・プラデーシュ州）は、東ヒマラヤの湿潤な高山地帯に位置している。チベット仏教徒のモンパと呼ばれる人々が多く居住し、風が吹くと民家や僧院からお香が漂い、屋根や峠に掲げられた青・白・赤・緑・黄の五色旗がはためく。現地において風はルンと呼ばれている。またルンは、人間の息や身体内部を流れるとされる気（または風素）の意味もある*。ルンがそよいでいるとき、現地の人々はどのようなことを感じているのだろうか。

* 身体内部を流れるルンはチベット医学の重要な概念の一つで、気や風素と訳されることが多い。しかし、中国医学の概念である気と完全に同じというわけではない。



図1 峠ではためく五色旗

天候を動かし、祈りを広める



図2 17世紀に建立されたタワン僧院

フィールドワークを始めて間もない頃、私はタワン僧院の座主に「一年で最も多く行う儀礼は何ですか」と尋ねた。その高僧は「それは雨乞いの儀礼です。雨を呼ぶ儀礼と雨を止める儀礼はどちらも同じなのですが、なぜだかわかりますか」と問いかけた。答えに困っていると、高僧は笑顔で「日照りも長雨もルンが止まった状態が長く続くことで生じます。なので、どちらもルンを動かす儀礼をすることで天候を変えるのですよ」と言った。農業や牧畜を営む村人にとって天候不順は重要な問題であり、とくに農業ではルンが滞りなく流れていることが豊穡をもたらすとされる。

人々は、ルンのよく流れる場所に五色旗を掲げ、生きとし生けるものの幸福や平穏を祈願する。五色旗には、チベット語の経文と一緒にルンタ（風の馬）と呼ばれる宝玉を背負った馬の絵が印刷されている。馬が人を乗せて大地を駆けるように、ルンは祈りを乗せて空を流れ、その祈りの力を遠くに運ぶと考えられているのである。チベット暦の

正月には、縁起の良い日に家に掲げている五色旗を新しいものに取り換える習慣がある。新しくなった旗の下で人々は真言を唱え、新年の祈りを捧げる。



図3 正月、家の屋上で五色旗を取り換えている

真言の力を吹く者たち

ルンは、真言の力も運ぶとされている。仏教儀礼の際、僧たちは声に出して経文を読み、信徒たちはその音に耳をすませる。真言の力は、悪霊による災いを祓うとされ、僧の発するルン（息）に運ばれて周囲の信徒の耳や身体に届き、信徒たちに享受される。

さらに、真言の力は、直接身体を治療することにも用いられる。村には密教修行をした民間治療者が多くおり、モンパ語で「真言を吹く人」を意味するンガク・ブッケン（チベット語ではンガク・ギャブケン）と呼ばれている。彼らは、特別な真言を唱えた後、自分のルンを患者の身体に吹きかけることで関節痛や腰痛、胃痛といった不調を癒やす。初めてその治療を見たとき、私は戸惑わずにいらなかった。治療者

は、関節痛患者の足の周りに息をひたすらフーフーと吹きかけるだけだったからである。しかし、患者は嬉しそうに帰っていった。

この民間治療の実践も、仏教儀礼と同様に、ルンの運ぶ働きを利用している。治療者は自らのルンを用いて真言の癒やしの力を患者に送り、患者はそのルンに直接触れる経験を通じて、癒やしの力が自分の皮膚の表面から関節の内部へと浸透していくのを感じとっているのである。



図4 ツアトンという竹筒を用いて真言の力を吹く治療者
(竹筒を使わない者もいる)

言葉の災禍

ルンが運ぶものは多岐にわたり、それによって必ずしも良いことが起こるとは限らない。例えば、タウンの伝承にルンに関わる次のような話がある。

あるとき、悪霊が人間に化けているのを村の娘が目撃した。悪霊は娘を脅し他言するなど言った。娘はうなずき誰にも言わなかったが、ある日秘密を言いたくてしかたなくなり、森のなかで地面に深く穴を掘

り、その穴に向かって秘密を囁いた。穴を埋めて娘が去った後、その地面に生えていた植物の茎や花を通して、娘の息のルンが土中から地上に出て行き、風のルンに乗って秘密を村に運び、人々の耳に秘密が届いた。正体がばれた悪霊は怒り、娘を喰ってしまった。

(村の古老からの聞き取り)

この伝承は、ルンによる秘密の拡散がもたらした悲劇を伝えている。何かを話すとき、声の大小にかかわらず、息のルンが言葉の力を運ぶことになる。そのため、人々は何気ない言葉が生む災禍に気を遣う。例えば、赤ん坊や新築中の家を周りの人が見て何かを話すとき、それが誉め言葉であろうと悪口であろうと、話者の発するルンが言葉を運んで噂となって広がり、噂される当人（赤ん坊や新築の家の住人）に災いや病気をもたらすといわれている。それを避けるため、赤ん坊の目や耳のそばに黒い炭で点がつけられ、家を新築する際は木製の男根像が柱に掲げられる。これは、周囲の人の視線を炭や男根像にそらすことによって言葉の災禍を防いでいるのである。村では何気ない会話が容易に噂になる。そのことがルンの運ぶという働きとともに経験されている。

世界が変わる合図

ルンは、天候や祈り、癒やし、秘密、噂といった様々な事象に関わり、環境や身体を行き来する。ルンの意味は状況に応じて変わる。チベット医学の概念として診断に用いられることもあるし、最近では車の冷房（クーラー）における人工的な風もルンと呼ばれるようになった。雨や雪のなか乗合自動車で山道を移動するとき、運転手は車窓を閉めた後もルンの流れが滞らないように、車内がどれだけ寒かろうと冷房を全開にしたりする。

ルンがそよぐとき、人々はいまルンが何かを運んでいるということを感じている。そのルンが運ぶ何かの力は、日常生活や身体に少し変化をもたらすものである。タワンの人々にとってルンがそよぐことは、世界（＝身体）が変わる合図が鳴っている感覚なのかもしれない。

(2025 年 3 月 31 日)

〈プロフィール〉

長岡 慶（ながおか・けい）

日本学術振興会特別研究員 (CPD・東京大学)、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員。専門は医療人類学、環境人類学、南アジア研究。主な著書論文に「アルナーチャル・ヒマーラヤにおけるシャクナゲと牧畜：異種間の連合としての移牧」『アジア・アフリカ言語文化研究』別冊 5 号 (2025 年)、“Care, Politics, and Blessing Pills in Tawang, Eastern Himalaya” (*Japanese Review of Cultural Anthropology* 23(1), 2022)、『病いと薬のコスモロジー：ヒマーラヤ東部タワンにおけるチベット医学、憑依、妖術の民族誌』（春風社、2021 年）など。



コリョ・サラムの言葉 (カザフスタン、コリア語)

いじんへ
李眞恵

(立命館大学 衣笠総合研究機構 研究教員・助教)

コリョ・サラムとは

私はコリョ・サラム（高麗人）を研究している。コリョ・サラムはロシアをはじめとする旧ソ連諸国に居住するコリアン・ディアスポラ集団である。その中でも特に中央アジアのカザフスタンを中心に現地調査を進めてきた。これまでよく聞かれる質問の一つが、彼らの言語状況はどうか、ということ。すなわち、どの言語を主に使用し、韓国の韓国語または北朝鮮の朝鮮語の駆使能力はどれくらいであり、世代によってどのような違いがあるのか、などである。わずか数文章の短い質問に見えるかもしれないが、実は、エスニック言語の変容については深く扱ってこなかった私にとって、これは研究課題としても十分なほど奥が深く、簡単に答えられない質問である。

まず、彼らを定義する簡単な概念から見ると、彼らは旧ソ連諸国に居住する「ロシア語を母語として使用する」少数民族集団である。そうだ、多くのコリョ・サラムはロシア語を自らの母語と認識している。カザフスタン政府の統計（2011年）によると、同国内のコリョ・サラムの98%がロシア語を話せる。これは同国の独自的な特徴というよりは、旧ソ連諸国全般のコリョ・サラムの特徴でもある。もう少し説明を付け加えると、彼らの歴史は1863年、朝鮮時代の農民たちがロシア沿海州に移住してから始まった。その後、ソ連期とソ連解体、旧ソ連諸国の独立期を経験していくなかで、彼らはロシア語化されてきた。徐々に自らの言語基盤を失ってきたというべきか。これに先立ってロ

シア語を母語と認識し、同言語の駆使能力が非常に高いという事実から、彼らの言語状況を推測できるかもしれない。

とはいえ、コリョ・サラムの歴史の始まりは朝鮮時代に越境した朝鮮人だったので、当時の彼らは朝鮮語が母語だったはずである。朝鮮地域の中でも特に北の帝政ロシア国境近くに住んでいた咸鏡道地方の朝鮮人が主に移住しているから、これは咸鏡道方言を駆使する朝鮮人が彼らの大部分の先祖だという話になる。それでは、彼らの母語だった朝鮮の咸鏡道方言は、長い歳月を経てどのように変容したのだろうか。残存しているだろうか。あくまでも個人の経験に照らして話すしかないという限界も存在するが、コリョ・サラムの言語状況を少し味わうには役に立つのではないか。

咸鏡道方言と3、4世代コリョ・サラムの言語

北朝鮮の人に私が会えたのは、大学時代の頃、下手なソウル語を使う脱北民に会ったのがすべてである。それ以上は、これまで研究資料として見た文献と映像から、咸鏡道方言がどのようなものなのか、大体分かる程度である。さらに、これまでの主要な現地調査の地域は、カザフスタンの経済および商業の中心である大都市であるアルマトゥであり、同国内でも人口対比労働人口が最も多い、すなわち若い人口が集まっているところである。調査対象は主に関連団体の関係者であり、彼らは一般人とは違って朝鮮語または韓国語で部分的な疎通が可能だった。その他、韓国語が話せる人々は外国語として学習した場合に限られていた。例えば、大学の韓国語科教員や学生、文化センターの韓国語教育担当者などである。彼らは現代韓国の標準語に近い言葉を使っていた。



強制移住後、コリョ・サラムが最初に定着したウシトベにある、
コリョ・サラムの墓地（2015年9月25日）

都市志向が強いコリョ・サラムは、その人口が主に都市に集中している。それなら大都市ではなく、田舎に目を向けてみよう。田舎なら、スターリン期強制移住後、最初の定着地だったウシトベはどうだろうか。ウシトベはアルマトゥ市のあるアルマトゥ州の外郭に位置しており、若年層の人口より老年層と出稼ぎのために都市部に移住した親世代の子供たちの人口が多い。韓国語関連機関の教員以外の人々の言葉はどうだろうか。現地調査中、運良く何人かの方に会うことができた。

彼らはだいたい祖父母世代からウシトベで暮らしてきた3,4世だったが、やはり特有のアクセントがあり、私も初めて聞く単語が交ざった咸鏡道方言で話していた。その中にはコリョ・サラム居住地でコリョ・サラムと交ざって暮らしてきたカザフ人もいたが、非常に興味深かったのは、彼らも完全ではないが咸鏡道方言のアクセントのような、いわゆる「コリョ語」で対話を続けていたことだった。しかし、間違いなく彼らはコリョ語で話していた。

言葉は失われつつあっても

その中で、ウシトペ内のコリョ・サラムの墓地を説明し、あちこちを案内してくれたある高齢のコリョ・サラムは、私が「韓国で生まれ育ち、日本に留学している」と自己紹介すると、「故郷はどこか」、「韓国の両親は元気なのか」、「両親の故郷はどこか」、「いつも両親にはいい子にしなければならない」と言ってきた。現地調査中、初めてお会いしたコリョ・サラムからこのような言葉を聞くのは、全く馴染みのない経験ではなかった。ウズベキスタンでの現地調査で、同国コリョ・サラムのメディアである『コリョ・シンムン』の代表者である A 氏に会った時もそうであった。コリアン同士の身近な表現だろうか。

A 氏は韓国語が話せた。若い時代に韓国で言語研修を受けたために、聞くことと話すことはある程度可能であるという。しかし読み書きは依然として難しいと話した。さらに、彼の夫婦が編集から発行まで共同で運営しているウズベキスタンの『コリョ・シンムン』は毎月1回、計12面の全面がロシア語で発行されている。ソ連期にすでにロシア語化され、咸鏡道方言を基盤に変容された彼らの言語であるコリョ語は、少数のエリートによってエスニック・メディア、演劇、文学などの形で伝承されてきた。しかし、次第にその言語が使われる場所、使われる機会や必要が消失することによって、特に後天的に教育を受けない以上、彼らの韓国語または朝鮮語の駆使能力はゼロに近い。つまり、一般のコリョ・サラムの母語はすでに古くからロシア語である。

インタビューで A 氏は「日本と中国のコリアンと違って、言葉を失った我々がコリョ・サラムであることは、もう言語ではなく我々が持っている慣習と文化が証明する」と語った。私らはご飯とキムチを食べて、先祖たちが教えてくれた冠婚葬祭を行っているという。しかし、これもまた5、6世代の若い世代層とは乖離がある。ソ連を経



韓国アンサン市におけるコリョ・サラム集中地の初等学校入学お祝いに関する韓国語とロシア語併記のプラカード（2023年3月6日）

験していない若い世代の母国は、ソ連解体とともに成立した15カ国、例えばウズベキスタン、カザフスタンなどであるからである。彼らはロシア語以外にも自らが属している国の言語も学習しなければならない。

A氏はソ連時代に教育を受けたエリートの一人であり、旧ソ連諸国の独立期を生きる普通のコリョ・サラムの状況、いわゆる一般の人々の状況とは異なる。また、次世代のコリョ・サラムはソ連解体後、それぞれ異なる特性を持つ旧ソ連諸国の基幹民族中心の国民統合に対応しなければならないという課題に直面してきた。

その一方、グローバル化のため以前の世代より自由になった移住により、若い世代の生活圏域と彼らのネットワークも拡張されている。したがって、彼らが居住において多様な経験を持つようになったことで、より多様な言語の駆使能力を保有するようになった。例えば、一部は英語圏への移住によって英語のレベルが優れている。また、他の一部は2000年代から本格化した韓国への移住によって、若干の韓国語によるコミュニケーションも可能である。咸鏡道方言を基に変容されたコリョ語の消失が、残念な事実であることは間違いない。しかし（まだ若干に過ぎないが）若い世代とコリョ語ではない韓国の標準語である韓国語で意思疎通ができるということは面白い事実であり、興味深い経験でもある。このようにそれぞれの世代と彼らの環境によっ

て言語状況は異なるが、今後の若い世代とのインタビューにはロシア語を基本としながらも、ますます現地語、例えばウズベク語やカザフ語などの補足を加えながら進めるべきかもしれない。また、より少し遠い未来には、英語もしくは韓国語でインタビューを自由に進められる日が来るかもしれない。

(2024 年 11 月 19 日)

〈プロフィール〉

李 眞恵 (い・じんへ)

立命館大学衣笠総合研究機構研究教員・助教。地域研究博士（京都大学）。専門は、中央アジア地域研究、コリアン・ディアスポラ研究、高麗人（コリョ・サラム）研究。最近の単著及び論文に、『二つのアジアを生きる：現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人（コリョ・サラム）ディアスポラの文化変容』（ナカニシヤ出版、2022 年）、“The Contemporary Status of the Ethnic



Group in Kazakhstan and the Koryoin's Nation” (*Asia Review* 11(1): 261–289, 2021), “Why do Diaspora Re-Emigrate to their Historical “Homelands”? A Case Study of Koryo Saram’s “Return” from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea” (*Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* 5: 51–65, 2023) など。

ことばの市場

(パキスタン、ウルドゥー語)

須永恵美子
(京都産業大学文化学部 准教授)

「ことばを売る市場」

南アジアの各地には、「ウルドゥー・バザール」と呼ばれる書店街がある。ウルドゥーというのは、パキスタンや北インドで話されている言語で、アラビア文字で書かれ、南アジアのムスリムの間では広く共通語として認識されている。ウルドゥー・バザールとは、まさに「ウルドゥー語市場」、すなわちことばを売る市場である。

インドの首都デリーのウルドゥー・バザールは、旧市街の大きなモスク、ジャーマ・マスジッドのすぐ南側にあり、観光客の散策コースに含まれる。土地柄ムスリムの多いエリアであるものの、ウルドゥー語に限らず、英語やヒンディー語の本も扱う書店が並んでいる。



ラホールのウルドゥー・バザール

パキスタンのラホールはムガル朝時代から続く古都で、この街のウルドゥー・バザールも古くから栄えてきた。ラホールのウルドゥー・バザールは、城壁に囲まれた旧市街のムーリー門から伸びるウルドゥー・バザール通りと、パーティー門側のガズニー通りに囲まれたエリアを指す。近くにはパンジャブ大学オリエンタルカレッジやガバメントカレッジ大学、高校などがあり、教科書や文具を求める学生を見かける。

写真にあるように、2～4階建ての雑居ビルがギッシリと軒を連ね、一つのビルにいくつもの書店が入居している。ビルの中でも比較的大きな書店や学校教科書を扱う店は1階の路地に面した一等地に、出版社や倉庫のような書店は奥まった場所や2階以上にある。学術書、辞書、雑誌、文芸、洋書など、店ごとに得意な分野は少しずつ異なり、小さな店が多いため、複数の本を探している場合は店舗を梯子する。

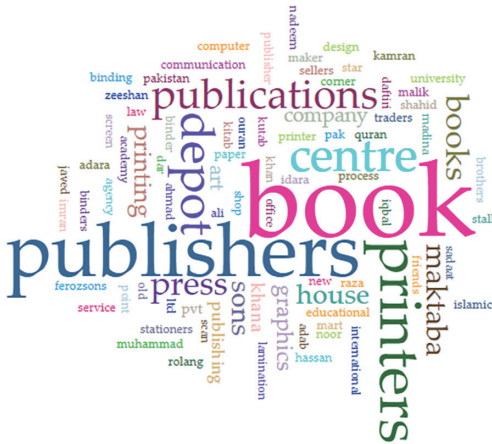
書店の名称

さて、ここにラホール市内 1096 軒の書店の店名リストがある。パキスタンの書店の寄りがいが発行した業界向け名簿によるものだ。このリストには、旧市街のウルドゥー・バザールを中心に、新市街を含めた市内の書店の多くが網羅されている。ウルドゥー語の本ばかり扱う市場であるものの、このリストは英語で作成されており、ウルドゥー語の店名や地名もローマ字で表記されている。

書店の名称を見てみよう。店名で最も使われている単語のトップ 10 は上位から book (248 軒)、publishers (153 軒)、printers (106 軒)、centre (72 軒)、depot (71 軒)、publications (60 軒)、press (43 軒)、books (40 軒)、maktaba (35 軒、ウルドゥー語で書店)、printing (34 軒) であった。いずれも店名のうち「〇〇書店」「△△書房」を表す部分である。ほかにも company、house、khana (ウルドゥー語で館

khāna) などもある。publisher や printers がついている店は、出版社や印刷所を兼ねている書店で、小規模の店でも出版社を名乗っていることは多い。

「○○書店」の○○につく店独自の名前については、店主の名前や地名などが入る。例えば、人名として最も多かったのはアリー (Alī/ʿAlī: 15 軒)、ハーン (Khan/Khān: 9 軒)、アフマド (Ahmad/Aḥmad: 9 軒)、ラザー、ヌール、イクバル (Raza/Raḏā, Noor/Nūr, Iqbal/Iqbāl: それぞれ 8 軒)、イムラン (Imran/ʿImrān: 7 軒)、ズィーシャーン、シャヒード、ムハンマド、マーリク、ハサン、フェローズ (Zeeshan/Zihān, Shahid/Shāhid, Muhammad/Muḥammad, Malik/Mālik, Hassan/Ḥasan, Feroz/Fīrūz: それぞれ 6 軒) であった。このうちハーンは家族名で、ヌールは男女ともに使われる名前、他は男性名である。例えば、アリー・ブック・デポ、ハーン・パブリケーション、アフマド・ブックセンターといった具合である。



さらに、名前と組み合わせて使う sons (33 軒)、brothers (10 軒) があり、「アフマド・ブラザーズ」、「ムハンマド・アリー & サンズ」などが、家族経営の店舗でよく見かける。この形式で最も有名なのは 1894 年創業の老舗「フェローズサンズ」(ferozsons) であろう。

他にも書店の特徴

ラホールの書店名のワードクラウド。文字が大きいほど店名に使われる頻度が高い
(Voyant Tools で筆者作成)

を表す名前としては、芸術 (art : 28 軒)、教育 (educational : 14 軒)、クルアーン (Quran/Qur'ān: 12 軒) などがつけられている。地名では、パキスタン (Pakistan : 12 軒)、イスラームの聖地であるマディーナ (Madina/Madīna: 10 軒) が多かった。ヌールは人名以外にもアラビア語で光を意味し、アル=ヌール・プリンターズなどイスラーム系の書店でも好まれる。

名もなき書店

ところで、名前のない本屋もある。

先ほどの書店リストは、店舗を構える書店を対象としていた。パキスタンにはこのリストに登録されたいくさんの書店がある。例えば、ラホールの目抜き通りであるマールロードのラホール博物館近くでは、日曜日の早朝に古本市が立つ。店主一人で持てる量だけの本を運んできた露天商が 10 数軒並び、料理、園芸、絵本、小説、雑誌など、得意の分野の古本を机やブルーシートに並べて昼前まで売る。こうした古本屋は、固定の店舗もショッピングカードも持たず、何曜日はこのエリア、という具合に常に市内を巡回しているそうである。

さらに小さな「名もなき書店」として、学校の塀や公園の柵沿い、狭い路地の脇に古書を広げた露店を各所で見かける。屋根も看板もなく、個人で出店しているフリーマーケットのような様相である。たいいてい店主一人で切り盛りしており、晴れた日の昼間だけ開店している。在庫はごくごくわずかであるものの、馴染みになると「この雑誌のバックナンバーを探してほしい」と頼むこともでき、市内のどこかにある倉庫から古本を見つけてきてくれたりする。ただし、いつでも営業しているわけではないので注意が必要だ。気になる本を見つけたら、一期一会と思ってその場で買うことをお勧めする。

ウルドゥー・バザールには書店だけではなく、印刷業者や製本業者、

出版社、製紙業、文具、段ボール卸など、本にまつわる様々な業種が集まっている。本を並べて売るだけではなく、本を作り出しているこの「ことばの市場」には、パキスタンのどこの街よりもウルドゥー語が詰め込まれている。



ラホールのパンジャブ大学の近くに立つ本屋。大学が近いので教科書や参考書の古書も扱う

(2024年10月22日記)

〈プロフィール〉

須永 恵美子（すなが・えみこ）

京都産業大学文化学部准教授、立命館大学アジア・日本研究所客員研究員。博士（地域研究、京都大学）。専門は南アジア地域研究、ウルドゥー語の出版文化。主な著書に、『現代パキスタンの形成と変容 イスラーム復興とウルドゥー語文化』ナカニシヤ出版（2014年）、須永恵美子・熊倉和歌子編『イスラーム・デジタル人文学』人文書院（2024年）。最近の論考に、「多言語



国家パキスタンにおけるウルドゥー語教育の選択」押川文子監修・小原優貴・茶谷智之・安念真衣子・野沢恵美子編『教育からみる南アジア社会：交錯する機会と苦悩』玉川大学出版部（2022 年）、「異なる言語の間をつなぐ言語：インド洋世界におけるウルドゥー語の役割」黒木英充・後藤絵美編『イスラーム信頼学へのいざない』東京大学出版会（2023 年）など。

スターバックスができない国 (イラン、ペルシア語)

黒田賢治

(国立民族学博物館グローバル現象研究部 助教)

中東の大国イランに、スターバックスができることはないだろう。まず現状として一店舗もない。同社がグローバル企業を代表する存在になっているだけでなく、映^はえてバズること——撮影した写真が際立った魅力をもち、それがインターネット上で爆発的に話題となること——に重要性が求められる時代にもかかわらずだ。

中東事情に通じた読者のなかには、それはイランだから当たり前ではないかと思った方もいるだろう。イランは1979年の革命後、アメリカを大悪魔とし、欧米を中心とした国際社会と軋轢を抱えてきただけでなく、アメリカから経済制裁を受けてきたからだ。そのため革命前にイランにあった米国系企業も撤退し、革命直後にはペプシなどの工場も、国家に接収されていった。だが、筆者がイランにスターバックスができないというのは、イランを取り巻く国際政治の深い話ではない。ペルシア語の発音上のルールからないということだ。

日本語の場合、基本的な発音ルールとして、子音単独で発音することではなく、「ウ」の音を補って発音する。英語の *ski* は、「skí:」ではなく「sukí:」と発音するし、*station* も「stéiʃən」ではなく「sutéiʃən」と発音する。同じように、子音だけで始まる言葉をペルシア語で発音しようとするとき、「エ」の音を補って発音する。*ski* は「エスキー」、*station* は「エステーション」という具合になるのだ。これに加え、*r* などの子音は無母音であっても発音されるし、母音も長母音化する。つまり *Starbucks* は、ペルシア語では「エスタールバックス」となるということだ。

今ふうカフェ文化

スターバックスができない国イランとは言ったものの、イランの人々が好む SNS アプリの一つはイメージを中心としている Instagram であり、映えてバズる重要性は、イランでも同じなのだ。加えて、近年のイランの都市部では、スターバックスのようなシアトル系のコーヒー店も含め、多様なカフェ文化が展開している。



テヘラン市内のシアトル系コーヒー店
(2016年9月15日)

1979年の革命後、イランにはアルコール飲料を公然と提供できる飲食店がない。そのため仕事終わりの一杯も、久しぶりに再会した知人と杯を交わすこともできない。ところが様々なカフェができるようになると、ケーキを食べながら話をしようということになるのだ。もちろん近年のようなカフェ文化が一般化する以前にも、サーデグ・ヘダーヤトやスィーミン・ダーネシュヴァルなどペルシアの文豪たちに愛されたテヘランのカフェ・

ナーデリーのような老舗カフェはあった。だが、格調高い老舗カフェであり、気安く入るような場所ではなかった。

気安く入れるカフェができることで、筆者も恩恵にあずかっている。調査の合間の空き時間に調査データを整理したり、仕事のメールを返したり、カフェで気軽にラップトップを開けるようになったのだ——調査中もメールを返さねばならないほど、忙しくなってしまったとい



テヘランの老舗カフェ、ナーデリー
(2019年3月10日)

うことでもあるので複雑な気持ちでもある。とはいえ、甘党ではない筆者がカフェに入ってクリームが載った映える飲み物を頼むことはなく、頼むのはもっぱらコーヒである。

イランのカフェで提供されるコーヒは、エスプレッソマシーンによる抽出法が主流であり、エスプレッソをお湯で割ったアメリカーノである。日本のようにドリップ式に抽出されたコーヒを飲むことはあまり見かけない。とはいえ、ブルーボトル・コーヒのようなサードウェイブ・コーヒの影響を受けて、浅煎りの豆を用いたドリップ式のコーヒを提供する店もなかにはある。あるカフェでヴァイ・シークステイという名前をメニューに見かけ、何かすぐにはわからなかったので尋ねると、淹れる器具の名前だと返ってきた。つまり日本のハリオの名高いペーパー式ドリッパー、V60のことだった。どんなコーヒが出てくるのかと思って頼むと、サードウェイブの影響を受けた、酸味が強調されたコーヒが提供された。

経済制裁下のカフェから変化が起きる

2018年以降の経済制裁はイランのカフェ文化にも少なからぬ影響を及ぼしてきた。上に述べたドリップ式コーヒでは、円錐状のハリオ、逆テント型の1つ穴のメリタと3つ穴のカリタ、いずれのドリッパーもペーパーフィルターが用いられるものの、肝心のペーパーフィルターが手に入らなくなったのだ。それ以上に深刻な影響はイラン



カフェで提供されたイラン料理ミール
ザー・ガーセミー（2019年3月11日）

国内で栽培のないコーヒー豆の入手であった。国際的な決済が困難になるなか、あの手この手を尽くして骨を折りながらコーヒー豆を手に入れていることを筆者の知人も語っていた。

コーヒーの話ばかりしているが、イランの新たなカフェ文化が影響を及ぼしているのは、コーヒーだけではない。さまざまなタイプのカフェが出現するなかで、ケーキやパスタのバラエティが豊かになっただけでなく、イラン料理に対する美意識にも影響が及んでいる。イラン料理を提供

するカフェでは、従来のイラン料理の手順で作られながらも、西洋カフェ風に飾られて料理が提供される。それはまるでイランの文化が西洋と相互に発展しうるものであることを示しているかのようでもある。

スターバックスがイランにできることはしばらくないだろう。しかし、それよりも素晴らしいカフェがイランにはいくらでもあるのだ。

（2024年9月24日記）

〈プロフィール〉

黒田 賢治（くろだ・けんじ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部・助教。専門は、中東地域研究、文化人類学、イラン政治、近代日本・中東関係史。近年の著編著に『戦争の記憶と国家：帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』世界思想社（2021年）、共編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版（2018年）、共著『「サトコとナダ」から考えるイスラム入門：ムスリムの生活・文化・歴史』星海社（2018年）、『イランにおける宗教と国家：現代シーア派の実相』ナカニシヤ出版（2015年）など。



紅茶しか出ない珈琲屋： コーヒーと紅茶のペルシア文化史 (イラン、ペルシア語)

黒田賢治

(国立民族学博物館グローバル現象研究部 助教)

コーヒーの語源が、アラビア語のカフワ (qahwa) であるというほど、コーヒーの歴史に中東地域は深くかかわってきた。コーヒーの発見についても、9世紀のエチオピアのヤギ飼いのカルディ少年の逸話に加え、13世紀のイエメンのモカのイスラーム神秘家ヌールッディーン・シャーズィリーの逸話や、15世紀の同じくイエメンのアデンのジャマルッディーン・ザブハーニーの逸話など中東に関連した伝承がある。いずれにしろ紅海を挟んだ兩岸のあたりでコーヒーが発見されたということは間違いないようだ。

16世紀までにイスラームの聖地マッカ（メッカ）には、コーヒーを飲みながら音楽を聴いたり、チェスのようなボードゲームを楽しんだりする施設が作られた。またマッカ巡礼に訪れた人々により、ムスリム社会の各地に同じような施設が作られるようになった。そして今日のイランにあたる地域にも16世紀前半には、ガフヴェハーネと呼ばれるコーヒーハウスが作られた。ガフヴェハーネとは、アラビア語のカフワがペルシア語に転訛したガフヴェ（コーヒー）とハーネ（家）からなる言葉で、直訳すれば珈琲屋である。それらは16世紀以降、都市文化の一つとして、一種のサロンの空間という位置づけで領内に広がっていった。

珈琲屋の紅茶

今日のイランにもガフヴェハーネと呼ばれる喫茶施設がある。だが、今日のガフヴェハーネでコーヒーが供されることはない。今日のガフヴェハーネには、水タバコとロシア式に点てられた紅茶チャイが必ずメニューにある。「ロシア式に点てる」とは、サマーヴァル（ロシア語のサモワールの転訛）と呼ばれるタンク状の湯沸かしの上に紅茶の入ったポットを置いて蒸気でポット内の紅茶を煮出し、客にはグラスに煮詰めた紅茶をタンクの湯で割って適当な濃さで供することを指す。インドのチャイグラスほどの大きさのガラス製のグラスにチャイは注がれ、陶器のソーサーにのせて提供される。頼む際に、薄いチャイが欲しければキャム・ランギー（「薄い色」の意）と、濃いチャイが欲しければポル・ランギー（「濃い色」の意）と言うと濃さを調節してもらえる。



あるガフヴェハーネの風景
(2016年9月15日)

卓上の入れ物やソーサーに添えられたガンドと呼ばれる「角砂糖」を口先に咥えながら、あるいは軽くガンドを紅茶に浸して口に含みながら飲む。「角砂糖」といったが、正確には砂糖を液状にして、冷却して固めたのち、遠心分離機にかけて作られるシュガー・ケーンを砕いたものだ。高齢者のなかには、紅茶を一度グラスからナルベキーと呼ばれるソーサーに移しかえ、冷ましてから飲むという人もいる。ナルベキーが一般的になったのは、20世紀後半のことであり、実は日本で生産されて

大量に輸出されていた。

チャーイがガフヴェハーネでも提供されるようになったのは19世紀後半以降のことであり、イラン社会での茶の消費の拡大と深く結びついている。茶そのものは、中国で飲用されていることが11世紀に記されており、知識としてはコーヒーよりも古い。加えて、モンゴルの侵攻とともにペルシア・イラン世界に茶が到来したという説もあるように、コーヒーに先行して茶が到来したことは確かであるようだ。また中央アジアに近い地域では、茶の飲用がコーヒーよりも一般的であったともいわれ、中国式の茶房もあったとも伝えられている。だが、上述のように16世紀以降、ペルシア・イラン世界ではコーヒーが喫茶文化の中心を占めるようになった。

コーヒーの時代

当時のコーヒーは、粉末状にしたコーヒー豆を煮だす、いわゆるトルコ式で点てられていたようだ。加えて、冬の飲み物として捉えられており、時に今日のアラブのようにカルダモンなどのスパイスを加えることもあったが、砂糖やミルクを入れずに飲まれていた。ただし砂



テヘランのカフェで供されたトルコ式コーヒー
(2016年9月23日)

糖は入れられなかったものの、用いられていたという説明もある。たとえば、18世紀にオスマン朝とサファヴィー朝領内に長期にわたって滞在したポーランド出身のイエズス会の修道士ジャン・ダデウ

シュ・クルシンスキーによるコーヒーの説明である。

彼によれば、焙煎の際に、ペルシアではビターアーモンドと油分のために生アーモンドを少し加えていたという。また点てる際には、香りのためにクローブをいくつか、消化のためにシナモンなども加えていたという。そして飲む際には苦味を「和らげる」ために「氷砂糖」を口に入れて飲んでいたという。それはまるで上述のように今日のイランで紅茶を飲む際に、ガンドと呼ばれるイラン式の角砂糖を口に含む姿を彷彿とさせる。とはいえ、18世紀にペルシア・イラン世界で政治的な混乱が続くと、コーヒーの飲用もすっかりと下火になってしまった。

18世紀末にガージャール朝が成立し、19世紀にある程度社会の安定が復活すると、コーヒーの飲用とともに茶の飲用も並行して進んでいったことが、ヨーロッパ人の旅行記などからうかがい知れる。ロシア式の紅茶抽出器具であるサマーヴァルがイランに紹介されたのも19世紀半ばといわれ、やがて19世紀後半になると、茶の消費はコーヒーを凌駕するようになった。

紅茶の時代へ

当時の茶の多くは、インドやセイロンから輸出されていた。1875年以降、カスピ海沿岸部のギーラーン地方で栽培が開始されたものの、成功はしなかった。当時のインド領事モハンマド・ミールザー・カーシェフル・サルタナが、インドからアッサム・ティーの種を密かに持ちかえって栽培に成功して以来、栽培が徐々に進んでいったといわれている。とはいえ、茶の栽培が本格化するのには、1925年に成立したパフラヴィー朝に入ってからである。近代化政策の一環として、中国から技術指導員を招いたり、インドやセイロンに技術獲得のために留学をさせたりといった政策によって進んでいった。

こうして紅茶が一般に安価に普及すると、ガフヴェハーネでも徐々に紅茶が供されるようになった。なかには、アルコール飲料を出すガフヴェハーネもあったが、アルコール飲料は新たに登場したカフェやカバレ(キャバレー)で出すものになっていった。やがてガフヴェハーネは水タバコと紅茶を基本的に提供する店となっていったのだ。

(2024 年 10 月 8 日記)

〈プロフィール〉

黒田 賢治 (くろだ・けんじ)

国立民族学博物館グローバル現象研究部・助教。専門は、中東地域研究、文化人類学、イラン政治、近代日本・中東関係史。近年の著編著に『戦争の記憶と国家：帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン』世界思想社(2021 年)、共編『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版(2018 年)、共著『「サトコとナダ」から考えるイスラーム入門：ムスリムの生活・文化・歴史』星海社(2018 年)、『イランにおける宗教と国家：現代シーア派の実相』ナカニシヤ出版(2015 年)など。



「溜めているか？」 (イエメン、アラビア語)

馬場多聞
(立命館大学文学部 教授)



イエメンのサナア旧市街。世界遺産である

「溜めているか（トゥハズイン）？」

イエメンの首都サナアに到着した初日に、これから暮らすこととなる家の門番に言われた一文である。何の話を始めたのかわからず、思わず「何を？」と聞き返した。門番は、自身の膨らんだ頬を指さしながら「カートだよ」と説明してくれた。

カートの嗜み

カートは、イエメンやその対岸のエチオピアで広く生産されている、ニシキギ科の常緑樹の一種である。その摘み立ての葉には、覚醒成分が含まれる。イエメンの人々は、この葉を口の中で噛みつぶし、出汁を飲んで覚醒成分を摂取することで、高揚感を得る。噛みつぶした葉については、片側の頬の内側に溜めていく。イエメンについて書かれた文献では、気心の知れた人同士が午後になると集まってカートを噛みながらおしゃべりに興じることが、イエメンの文化のひとつとして説明されている。しかし、ダッバブ（乗り合いバス）の運転手や地方からの出稼ぎ労働者と思しき人々、商店主のような自営業者が一人でカートを口に入れている様もしばしば見られ、誰かと集まったりおしゃべりをしたりすること自体はカートを嗜むための必須の条件ではない。



サナアのカート市場
(元青年海外協力隊員・相場由夏氏撮影)

一般には、カートを嗜む一連の動作を、「カートを噛む」と日本語や英語では表現する。しかし当のイエメンにおいては、「噛む（マダガ）」という動詞を使うことはなく、「（口に）溜める（ハッザナ）」の語が使われる。そしてその目的語である

「カート」が明示されずとも、「溜める」という語だけで「カートを嗜んでいる」という意味となる。

確かに、カートを楽しんでいる様子を外から見た場合、もっとも特徴的なのは頬を溜めることで丸く膨らんだ頬である。インターネット上で「カート イエメン (qat Yemen)」で画像検索をすると、頬を膨らませた男たちの様子がごまんと出てくるので、ぜひ探してみしてほしい。画像を見た人のなかには、「人類の頬はここまで膨らむものなのか」と訝しがる人もいるだろう。この点について、サナアで知り合ったカート嫌いなエジプト人医師は、眉をしかめながら、「カートを手を溜めすぎて頬の毛細血管がぶち切れてしまっているから、あそこまで膨らむようになっているんだ」と話していた。これが事実かどうかかわからないが、カートを楽しむイエメン人の頬をつまんでみると、確かに癖になる柔らかさをしている。

「溜めているか？」は、「こんにちは (アッサラーム・アライクム)」や「元気か (ケイファ・ハールカ)？」と同じような挨拶の常套句として使われていた。道でばったり出会ったイエメン人同士が「溜めているか？」と言いながら握手をしていたし、筆者自身、知り合いからも知らない人からも、出会い頭にしばしば「溜めているか？」と訊かれたものであった。「溜めているか？」を耳にしない日はなかったかもしれない。

「はい」か「いいえ」か、それが問題だ

「元気か？」というニュアンスの「溜めているか？」へどう返事をすればいいのか、一時期悩んだ。こちらの状態としては、①元気でありカートを手を常習している、②元気であるがカートを手を常習していない、③元気でないがカートを手を常習している、④元気でないうえにカートを手を常習していない、の4パターンがあると、紙に場合分けを書いて気づいてしまったためである。筆者はそこまでカートが好きになることはできず、もっぱら②か④の状態で過ごしていた。何も考えずに「はい(ア

イワ)」と答えた場合、①と認識され、何となく遺憾である。「いいえ（ラー）」と答えたら④と認識されると思うが、そもそも元気でなかったとしても「いいえ」とは答えないもののような気がする。イエメン人の様子を観察していると、特にこの「溜めているか？」に明確な返事をしていなかったり、あるいはお互いにカートを嗜んでいることを前提として（すなわち①を意図して）「はい」と言ったりしているようだった。

筆者は、一番相手にうける返答は何だろうという余計なことまで加味したうえで、①と思われてもよいという結論に達した結果、「毎日溜めている（ウハッズイン・クッラ・ヤウム）！」と嘘をつくに至った。相手は「そうかそうか」と笑顔になっていたので、コミュニケーションを円滑にするためには許される嘘であったように思う。

近年では、カートをめぐり、大量の農薬や水を用いて生産することによる環境への悪影響や、摂取する人の健康被害、依存性の高さ、消費者の家計の圧迫などが、しばしば問題視されている。そのため、カートを好まないイエメン人も、多く見られる。お世話になった研究所の先生がまさにその一例であったが、初めて出会った際に「溜めているか？」と尋ねてこられた。幸いなことに前述のような逡巡がまだ生まれていない頃であったため、純粋な質問文と考えて、素直に「いいえ、好きではありません（ラー・ウヒップ）」と答えた。すると、「よろしい（タイイブ）」とつぶやきながら頷かれていたことを、今でも覚えている。

後に、シリアを旅行で訪れた際、現地で出会った人に「溜めているか？」と尋ねてみた。すると、イエメンに到着したばかりの頃の私と同様に、「何を？」と聞き返してきた。「溜めているか？」はどうやらほとんどイエメンの方言であることを、シリアでようやく実感した次第である。

（2025年1月16日）

〈プロフィール〉

馬場 多聞（ばば・たもん）

立命館大学文学部教授。専門は、西アジア史。著書論文に『宮廷食材・ネットワーク・王権：イエメン・ラスール朝と一三世紀の世界』（九州大学出版会、2017年）、『地中海世界の中世史』（共編著、ミネルヴァ書房、2021年）、「海を渡るということ：14世紀のイエメン・ラスール朝の裁判官と大宦官」鈴木英明編『移動の文明誌：「自由」と「不自由」の狭間で』（思文閣出版、2025年）など。



シンキーティー知識人を求めて： 知の薫りに魅せられて (湾岸諸国、アラビア語)

竹田敏之

(立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 教授)

知の探究、アラビア語の旅路

アラビア語は、東は西アジアのアラビア半島から、北アフリカを横断して西は大西洋に面したモーリタニアに至るまで、22の国と地域で用いられている国際語である。私がアラビア語を学び始めた頃、教科書の一頁で、次のような印象深い言葉に出会った。「知識を求めよ、たとえそれが中国にあらうとも」。当時、これはハディース（預言者ムハンマドのことば）の一つとして紹介されていた。現在ではハディースとは見なされず、アラブ・イスラム世界で広く親しまれる格言として定着している。

その背景には、近年飛躍的に発展したハディース学の存在がある。膨大な伝承について、はたしてそれが本当に預言者の言葉であるかどうか、伝承経路や本文の信憑性をめぐって、専門家たちによる精緻な分析・照合の作業が進められた。その結果、「知識を求めよ、たとえそれが中国にあらうとも」は、



生徒のために、ラウフ（書字板）にクルアーンの章句を書写する先生（2012年2月）。クルアーンの学習だけでなく、文法学や法学の習得にも書字板が使われる

厳密には預言者に帰することはできず、ハディースとは認められないという見解が優勢となった。

それでも、この言葉は今も色あせることなく、知識を求める姿勢を力強くたたえ、普遍的価値をもつ名言として、人々の心に響いている。インターネットやオンライン授業が普及した現代でも、知識を求める者は師のもとへ足を運び、直接学び、その人となりを会得することを尊ぶ。知識とは、単なる情報ではなく、それを体現する師の存在と不可分である。当時の「中国」は、アラブ人にとって遠方の象徴だった。そこに師がいれば、どんな距離もいとわず旅をする。それが大事だったということであろう。かつては今のようにパスポートやビザといった障壁がなく、人の移動が自由だったことも大きい。今もアラブ世界では、知識を求める側はもちろん、そのような者に対し門戸を開放し受け入れる側の意識も、昔と変わらないように思う。

この「知識を求めよ」の動詞から派生した行為者名詞（～している人）が「ターリブ」だ。日本語では「学生」と訳されるが、日本の「学生」とはニュアンスが異なる。日本では、学生は一時的な身分であり、大学を卒業すれば「社会人」になる。しかし、アラビア語のターリブは、「知識を求めている」状態や意識そのものを指す。何歳であろうと、人生のどの段階であろうと、知を追い求める者は皆ターリブなのだ。実際、年配の方が「私はターリブです」と自己紹介する場面に何度も出会った。別の格言に「揺りかごから墓場まで知識を求めよ」とあるように、知識の追求に終わりはない。

興味深いことに、このターリブという語は、西方アラブ地域（モロッコやモーリタニアなどのマグリブ諸国）では、「師匠」や「イスラーム学の専門家」の意味をもつ。敬称として「ターリブ」を冠した人名も多い。たとえば、聖典クルアーンの綴字法に関する韻文要綱の著者、ターリブ・アブドゥッラー（モーリタニア出身、1834年没）は、まさにそのような大学者である。ちなみに、他のアラブ地域では「トゥ

ワイリブ」という表現も耳にする。これは「ターリブ」の縮小形であり、「猫」から「子猫」、「ハサン」という人名から「フサイン」（愛らしいハサンの意）を作るように、「今もなお知識を求める未熟者」という謙虚なニュアンスをもつ。この「トゥワイリブ」を自らの肩書や敬称として用いる者も少なくない。

シンキートの国を目指して、西へ東へ

学生時代、私はエジプトのカイロ大学とクウェートで学ぶ機会を得たが、大学院修了後、伝統文法の教授法とその実践を深く研究したいと考え、アラブ世界の最西端にある国、モーリタニアを目指した。なぜモーリタニアだったのか。そのきっかけは、あるサウディアラビアの先生との出会いだった。その先生は、「アラブの古詩や文法学の真髄を体感したいなら、シンキートの国を目指しなさい」と教えてくれた。シンキートの国とは、現在のモーリタニアを指す古い呼び名である。

モーリタニアは、アラビア語を公用語とするれっきとしたアラブ諸国の一員である。1960年にフランスの植民地支配から独立を果たした。その国名「モーリタニア」は、植民地時代にフランス軍が用いていた呼称に由来する。ギリシア語の「マウロス」（黒を意味し、英語の「ムーア」の語源）や、ローマ時代の属州「マウレタニア」にちなむともされるが、独立後もこの名称が引き継がれた。一方、古くから親しまれてきた地域の呼称は、今も昔も「シンキート」である。シンキートの語源については、「馬の目」を意味する現地語がアラビア語化したものとする説が有力である。

シンキートは、首都ヌアクショットから北東へ約 600 キロの内陸に位置する小さな町の名前でもある。日本から遠く離れたモーリタニアの沙漠の奥深く、西の果てに佇むこの町は、今でこそ途中まで舗装道

路が整備されたものの、町内に舗装道路はなく、電気もほとんど通っていない。かつてはマッカ（メッカ）への巡礼路の要衝として栄え、数多の学者が集う学問の中心地であった。その歴史的重要性から、「シンキート」は町の固有名詞を越え、地域や国全体を指す呼称としても用いられてきた。



現シンキートの町。電気の無い世界で、アザーンが日々の時間を刻む
(2012年2月)

この辺境の地には、知を求めて海を越え、沙漠を越えて集う学生たちの姿があり、また、何世紀も前に編まれた文法書や法学書を、一字一句違えずに誦んじて教える地元の学者たちがいた。その威容と気迫、そしてそこに満ちる熱気のすべてが、私には驚きの連続であった。現地では特に、13世紀のアンダルス出身の学者イブン・マーリク（1274年、ダマスカス没）が著した『千行詩』を用いた文法学習が盛んで、その伝統が今なお息づいていた。

ある日、私は現地の先生に、フィールーザーバーディー（1414年没）が編んだ古典辞書がモーリタニアでどのように使われているか尋ねた。すると先生は次のように語った。「本や紙が普及していない沙

漠の地、移動の多い遊牧生活では、辞書とは“引く”ものではなく、“覚える”ものである。必要な時、問われた時に、語義を即座に思い起こし、提示できなければならない」と。そして続けて、こう教えてくれた。かつて、ガザ（現パレスチナ）出身で四大法学派の学祖であるシャーフイー（820年没）は、次のように詠んだという。

どこへ赴こうとも、知は常に我と共にある。
我が心は、知を蔵する器、深き箱のようなもの。
家にあれば、知もまた家にあり、
市場に出れば、知もまた市場に伴う。



シンキートの町に佇むモスク。タイルや絨毯はなく、皆が砂の地面に直接平伏する
(2012年2月)

シンキートの国、すなわちモーリタニア出身の者（あるいはその出自をもつ者）は、アラビア語で「シンキーティー」と呼ばれる。英語の「Japanese」のように、地名の語尾を変えることで出身者を表す語である。ただし、「シンキーティー」は単なる出身地を示すにとどまらず、「シンキーティー知識人」という言葉に象徴されるような、深い学識と威厳を帯びた名でもある。

そのため、湾岸諸国など多くのシンキーティー知識

人が活躍する地域では、人名にこの語が付く者もいれば、名乗らずと

も「シンキーティー」として知られ、敬意を集める者も少なくない。とりわけエジプトやヨルダンといった東方のアラブ諸国や、サウディアラビア、アラブ首長国連邦、カタル、クウェートなどの湾岸地域では、シンキーティー知識人への敬意がひときわ篤い。アラビア半島というアラブ・イスラーム文化の「本場」の人々の間でさえ、「シンキート知識人の学識には到底かなわない。彼らの言葉づかいには一分の隙もなく、誤用はおろか、噛むことさえない」といった声がしばしば聞かれるのだ。



クウェート中心部にある詩の図書館「バーブティーン図書館」で講演を行うシンキーティー知識人、ウルド・アッバー先生〔左〕（2014年3月）

それもそのはず、モーリタニアの人々の多くは、アラブの源流の一つとされるイエメンのヒムヤル部族にその系譜をもつと伝えられている。また、モーリタニアが「百万人の詩人の国」として知られることも、名声を支える背景の一つであろう。

湾岸諸国とシンキーティー知識人

「百万人の詩人の国」。このキャッチーな綽名は、クウェートの情報省が発行する汎アラブ向け文芸誌『アラビー』の1967年4月号で、モーリタニアがカラー特集された際に生まれた。その中で、詩人の

宝庫であるモーリタニアを「百万人の詩人（の国）」という表現で紹介した。当時の人口は100万人ほどだったから、国民みんなが詩人の国ということになる。もちろん誇張はあろうが、じつにユニークな言い回しである。今風に言えば、アラブ諸国の読者のあいだで一気に「バズった」ワードだったと言える。現地を訪れた湾岸出身のアラブ人記者にとって、モーリタニアに根付く伝統的な詩文化の世界は、それほど鮮烈な体験だったに違いない。

この国は、イスラーム学や古詩を基盤とするアラビア語学の分野において、豊富な知的人材を擁する地である。19世紀のナフダ（アラブ文芸復興）期、さらには1970年代以降の湾岸諸国の勃興期において、アラブ諸国の近代化と発展のために多くの知識人や学者を供給してきた。

その様子は、エジプトの文豪ターハー・フサイン（1889-1973）の自伝的小説『日々』にも描かれている。著者自身をモデルとする主人公が、アズハル大学で、驚異的な暗記力をもつシンキーティーの大先生からハディース学の講義を受け、深く感銘を受ける場面である。また、東方アラブ地域で名を馳せたシンキーティー知識人には、古典文献の校訂・研究に多大な貢献をしたアフマド・アミン・アラウィー（1872頃-1913）がいる。彼はエジプトの老舗書店ハーンジー書店との交流を通じて、『ムアッラカート詩解説』や『歌の書への補遺』といった重要文献の出版に携わったことで知られている。

教育や司法の分野でも、シンキーティー知識人は各地に足跡を残した。たとえば、クウェートの近代学校の先駆けであるムバーラキーヤ学校の設立に寄与したファール・ハイル（1876-1932）。ヨルダンにおける法学ルネサンスを導き、同国初の最高裁判事に任命されたマヤーバー（1905-1990）。サウディアラビアの著名な法学者イブン・バーズの師であり、啓典解釈書『明示の光』の著者であるムハンマド・アミン・ジャカニー（1905-1974）。彼らはみな、シンキーティー知識

人の代表格である。

さらに、サウディアラビア王立印刷所が刊行するムスハフ（クルアーンの印刷本）の校閲・監修にあたっては、シンキーティー知識人の名がずらりと連なり、その存在感の大きさがうかがえる。同印刷所があるサウディアラビアのマディーナ、そのスィーフ地区では、今なお「ラウフ」（書字板）を用いたシンキーティー式の伝統教育が息づいている。

近年、インターネットや動画配信の普及により、シンキーティー知識人の名声とモーリタニアの伝統文化は、湾岸諸国で一層注目を集めている。特に、アラブ首長国連邦のアブダビは、マーリク法学派を公式に採用していることから、モーリタニアやマグリブ諸国出身者との親和性が高い（マグリブ地域ではマーリク法学派が主流）。碩学アブドゥッラー・バイヤ（1935-）を筆頭に、7名ものシンキーティー知識人がムフティー（権威ある法学者）として重要な役割を担っている。



アターイ（茶）は三煎で味わう。毎煎、風味が深まる（2012年2月）

モーリタニアでのフィールドワーク以降、私は湾岸各地で幾度となくシンキーティー知識人に会い、インタビューを重ねる機会に恵まれた。彼らは決して自らを誇示せず、静かに語り始める。その姿勢にはただならぬ

気配が漂い、ひとたび話し出すと、豊かな語彙と精妙な言い回しの中に深い教養が自然ににじみ出る。湾岸諸国が急速に変貌し、高層

ビルが林立する都市の片隅にあっても、彼らの知の営みは力強く生き続けている。そんなフィールドワークの日々の中で、私はふとシンキーットの沙漠で出会った三つの風景を思い出した。

風をはらむゆったりとしたダッラーア（伝統的な長衣）
に身を包み、静かに語る学者の姿。

三煎にわたって丁寧に淹れられるアターイ（茶）の香りと、
その一杯に込められたもてなしの心。

琥珀色のラウフ（書字板）に書かれたクルアーンの章句
——墨汁で書き、水で洗い、記憶に刻む反復の所作。

知とは単なる情報の寄せ集めではなく、沙漠に響く実践の音声であり、学者の謙虚な姿勢であり、共同体の中で継承される学統の営みである。そうした知の薫りに触れることで、私はシンキーティー知識人の伝統が、湾岸諸国のみならず、アラブ世界全体で輝き続けるであろうと確信するに至った。その躍動を注視しながら、これからもアラビア語ということばの魅力を追い続けたい。



アラブ首長国連邦の豊かな水、高層ビルが輝く（2014年、シャルジャ）

参考文献

小杉泰 (2019) 『ムハンマドのことば：ハディース』 小杉泰編訳、岩波書店。

竹田敏之 (2024) 「デジタル化される聖典：クルアーンとハディースの音と文字」『イスラーム・デジタル人文学』 須永恵美子・熊倉和歌子編、人文書院、pp.36-65.

竹田敏之 (2019) 「現代モーリタニアにおけるアラブ・イスラーム文化の諸相」『現代アラビア語の発展とアラブ文化の新時代：湾岸諸国・エジプトからモーリタニアまで』 ナカニシヤ出版、pp.182-211
al-Naḥwī, al-Khalīl. 1987. *Bilād Shinqīṭ: al-Manāra wa al-Ribāṭ* (シンキートの地：学知の灯と信仰の砦). Tūnis, ALECSO.

〈プロフィール〉

竹田 敏之 (たけだ・としゆき)

立命館大学 立命館アジア・日本研究機構教授。同アジア・日本研究所副所長。専門はアラビア語学、中東地域研究、現代アラブ文化論。主な著書に『現代アラビア語の発展とアラブ文化の新時代：湾岸諸国・エジプトからモーリタニアまで』（ナカニシヤ出版、2019年）、『アラビア語表現とことんトレーニング』（白水社、2013）、『ニューエクスプレス アラビア語』（白水社、2010年）など。



コロナ禍で生まれたキャッチフレーズ (インドネシア、インドネシア語)

足立真理

(立命館大学 衣笠総合研究機構 専門研究員)

2020 年、新型コロナウイルスの登場によって、世界はパンデミックに見舞われた。この新しい感染症に対して、有効なワクチンが開発されるまでは、どうやってこの感染症が広まるのかを周知・啓発し、個人の行動変容を促すことが、政府や行政のできる最低限の対策だった。

例えば「ソーシャル・ディスタンス」(社会的距離)や「ステイホーム」(家にいよう)など、人流を抑制するための言葉が、英語圏を中心に啓蒙的に広まり、日本でも新出の外来語として多用された。日本独自の造語としても、「三密 (密集、密接、密閉)」というキャッチーなキーワードを作り、それを回避するように政府や行政が国民にお願いしていたのは記憶にあるだろう。これは英語圏に逆輸入され、「密室 (closed spaces)」、「密集 (crowded places)」、「密接 (close-contact settings)」の頭文字をとって “Three Cs” と訳された。

私の研究するインドネシアでも、国民へのわかりやすい啓発活動のため、キャッチフレーズが発明された。インドネシア・ウラマー評議会の議長であり、当時国内最大のイスラーム社会組織ナフダトゥル・ウラマーの最高指導者でもあった副大統領マアルフ・アミンは 2020 年 4 月 16 日、オンラインでの「国家の安全のためのドア (祈禱) とズィクル (アッラーの御名の唱念 / 連禱)」会において、「イマン (信仰: Iman)、イミュン (免疫: Imun)、アマン (安全: Aman)、アミン (祈り: Amin)」という四つの実践を行うことによりコロナと戦うことができると述べた。



オンライン登壇する副大統領マアルフ・アミンの姿を伝える副大統領オフィスのニュース（2020年4月20日付）

<<https://www.wapresri.go.id/lawan-covid-19-dengan-menerapkan-iman-imun-aman-dan-amin/>>

この祈禱会の模様は、インドネシアのイスラーム系新聞社では最大手とされる日刊紙『レプブリカ（Republika）』などで多く報道され、私も知るところとなった。

まず「信仰」は、この疫病がうまく退散できると信じること。「免疫」は、健康を維持し、ビタミンを摂取し、定期的な運動を行うこと。「安全」は、人々との社会的な距離を保ち、衛生状態を保ち、混雑した場所に集まらないようにすることだという。そして最後の「祈り」は、それら三つを実践したうえで、後はアッラーに祈りを捧げることだという。日本風に言えば、神頼みというより人事を尽くして天命を待つ、といったところだろうか。副大統領は、これらの政府のアドバイスに従って国民全員が四つの実践を協力しておこなうことによってコロナに対抗することができる」と強調した。短く覚えやすく、押韻によりリズムを

作ることによって記憶に残りやすい。この言葉をもってして、コロナ禍における重要事項を分かりやすく啓発しようと試みたのである。

この新しいキャッチーな標語からは、二つの特徴が見て取れる。一つ目は、信仰の重要さである。国是であるパンチャシラの第一項にも「唯一信への信仰 (Ketuhanan Yang Maha Esa)」が挙げられるように、この国において神を信じることは重要な原則である。国民の休日にも宗教上の祝祭日が多い——もちろんイスラームだけでなくキリスト教や仏教、ヒンドゥー教なども含む——ことから、この国における信仰の重要さがわかるだろう。

二つ目は、インドネシア語の外来語の借用の多さという特徴である。例えば第一の Iman (信仰) に関しては、同じく信仰という意味のイーマーン (īmān) というアラビア語が語源であり、Imun (免疫) に関しては、英語の免疫 immunity が語源である。Aman (安全) は安全という意味のアマーン (amān) というアラビア語が語源である。最後の Amin (祈り) に関しても、インドネシア大辞典 (KBBI) によると、「受け入れる、認める、そうする (祈りの最中、または最後に締めくくりでいう)」とある。キリスト教英語圏で「アーメン」とお祈りするのと同義である。

外来語の借用の多さについては、インドネシア語の特徴の一つであり、重要な抽象概念や日常語の中にサンスクリット (kata 「言葉」、agama 「宗教」、negara 「国家」、gula 「砂糖」、suka 「好き」など) やアラビア語 (awal < awwal 「始まり」、adil < ‘adl 「正義」、hadir < ḥaḍara 「出席する」など) からの借用語が多く含まれていることがわかる。旧宗主国のオランダ語からは日常語になった単語 (koran < krant 「新聞」、kantor < kantoor 「オフィス」) が多いのも特徴である。近年では contribusi < contribution 「貢献」や ekonomi < economy 「経済」など、毎年多くの英語からの新しい借用語も増えている。

これは、インドネシアの歴史が、海を通じて仏教文化、ヒンドゥー

文化、イスラーム文化、また植民地支配を受けた時代には宗主国オランダをはじめとする西欧諸国の文化による影響を受け続けたことも一因であるといわれる。総じて、インドネシア語は外来語を取り入れる力が強いといってもいい。

借用語といっても英語の単語がそのまま使われるわけではなく、インドネシア語風に消化されて使われることが多い。例えばアラビア語の長母音は、インドネシア語化されたときに消滅するため、伸ばして読まない。ウラマーはウラマ、イーマーンはイマンとなる。また discussion の語末の sion は、si になる。これはオランダ語の影響を受けたインドネシア語の接尾辞である。Significant の語末の t は、インドネシア語になると signifikasi となり消えてしまうが、その理由は語末に子音連続が認められないインドネシア語の特徴によるものである。ちなみに語末でない場合は、struktur（構造）のように外来語の連続子音はそのまま使われることもある。

このように借用語が多いという点では、インドネシア語もまた日本語と変わるところがない。様々な外来語を借りることでインドネシア語の語彙は多くの文化や概念を受け入れ、豊かになっている。「多様性の中の統一（Bhinneka Tunggal Ika）」をスローガンとするインドネシアは、日々新しく変わり続けることばの上でも絶妙なバランス感覚を有しているのだろう。



イスラーム団体が運営する孤児院で日本語を教える筆者

〈プロフィール〉

足立 真理 (あだち・まり)

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員。

地域研究博士（京都大学）。専門は地域研

究、東南アジア研究、イスラーム経済。最

近の著作に『イスラームの慈善の論理と社

会福祉：現代インドネシアにおけるザカー

トの革新と地域の主体』（明石書店、2025）

年)、「格差是正の処方箋：定めの喜捨ザ

カートの発展 (28 章) | (西尾哲夫・東長)

靖編『中東・イスラーム世界への30の

¹⁰ 尾﨑 眞由美 (2019 年)、『「新自由主義」の政治経済学』ミネルヴァ書房、2021 年)、“Discourses of Institutionalization of

Zakat Management System in Contemporary Indonesia: Effect of the

Revitalization of Islamic Economics” (*International Journal of Zakat*,

Vol. 3, pp.23–35, 2018) など。



「ハラール」の味 (マレーシア、マレー語)

桐原翠

(京都府立大学農学食科学部和食文化科学科 講師)

ハラール食品を初めて口にしたのは、10年ほど前に初めて東南アジアのマレーシアをフィールド調査のため訪れた時のことであった。マレーシアは、温暖な気候で、たとえ12月であっても気温が30度を超える熱帯地域である。クアラルンプール国際空港に降り立った私は、現地の先輩に迎えられ、昼食に向かった。マレーシアの料理のほとんどは辛い味付けとなっているため、その刺激に注意しながら食べるよう説明されたが、辛さは私にとっては全く問題なく、日本ではお目にかかることのできないハラール認証を取得したケンタッキーフライドチキンのスパイシーチキンとコーラを平らげた。これが「ハラール」(アラビア語由来ではハラールと発音し、マレーシアの国語ではハラルと発音する)との出会いである。マレーシアは、ハラールな食品や製品に認証を付与する制度(ハラール認証制度)を世界に先駆けて構築してきた。

ハラールとハラーム

私は、ハラール食品を通じて多民族国家であるマレーシアの民族の多様性や共存関係を研究している。私の大学の授業を受講する学生さんから、味に関する質問を受けること多々ある。それは、ハラール認証を取得した食品とそうでない食品とでは、味が異なるのか? といったものである。特に、味の違いはない、というのが私の答えである。そのことは「ハラール」という言葉の意味を考えてみれば明らか

である。

「ハラール」とは、アラビア語で合法を意味し(マレー語では「ハラル」と発音する)、その対極にあって禁止を意味する「ハラーム」という言葉がある。日本では、「ハラール」とは豚とアルコールを除いた食事という認識が散見されるが、具体的にハラール食品とは、イスラーム法に照らして、合法的な手順で加工、生産、流通された食品や食材を指すに過ぎない。もちろん、ここには豚やアルコールを除くといった認識も含むが、その他に、「と畜の際にアッラーの御名を唱える」などといった内容も含んでいる。

さらに、ここで重要なのは、ハラールとは、食事にのみ用いられる用語ではなく、ムスリム(イスラーム教徒)の生活全般において用いられる言葉であるということだ。イスラーム法には五範疇といった行為規範に関する表現がある。義務、推奨、許容、忌避、禁止の五つで



カレーパウダーが入った袋、袋の左下にハラールロゴが確認でき、英語、マレー語、中国語の表記も確認できる(2019年12月)

あることから、日本の研究者の間では長らく、義務から忌避行為までが「ハラール」を意味するのだと誤った認識がなされてきた。近年の研究成果により、ハラールとハラームの二項対立と五範疇は異なる次元の話だということが明らかとなってきた。これは私の大学の授業でよく用いるたとえであるが、ニンニクという食材自体はハラールであるが、ニンニクを食べて礼拝所に出向くのは忌避行為に当た

るといった具合である。単に合法を示す用語かと思っていたものが、現地の生活や状況を考えてみるときちんと意味をなして機能していることがわかり大変興味深い。

多民族国家マレーシアの食文化

ここまで読み進めてみると、それではハラール食品と言うのはアラビア語から来ていることから、中東地域が出发点となった現象なのだという印象を受けるかもしれない。なぜマレーシアなのかという話だと思う。

現在のマレーシアは、英国植民地から独立した1957年以降に形成されてきた。この国は、大変複雑性を持った国である。国内は、主にマレー系が6割、中華系が2割、インド系1割そして、その他1割



マレーシアの国旗と中華風の提灯が確認できる、チャイナタウン(2017年9月)

の多民族が共存している。それに伴い、多様な宗教、文化、慣習などが存在する。宗教の多様さは、独立以降に連邦の宗教と定められたイスラームをはじめとし、キリスト教、仏教、儒教、ヒンドゥー教に及ぶなど多岐にわたっている。このことは、時に、マレーシア社会において緊張を生んできた。特に、食事においてはその事柄が顕著に表れている。

そもそも、マレー人とはだれのことを指すのかだろうか。マレーシアの歴史を振り返ると、マ

レー系、中華系の民族間格差も一つの要因となり、1969年に大きな暴動事件が生じている。ただし、1969年以降、1度も民族間での大きな争いが生じていないことを考えると、その事件を教訓として民族間のパワーの分配を見極めることに成功してきたマレーシア国家の姿を窺うことができる。

19世紀半ばには、スズ鉱山やゴム農園の拡大により、中国とインドから移民の流入が活発化し、商業などに華人系が、農園労働者、鉄道建設事業などにインド系が従事することとなった。また、当時のイギリス植民地政府はマレー語を話し、イスラームを実践する人を「マレー人」と定め、マレー人およびマレー半島に住む原住民、華人、インド人をまとめてマラヤと呼称し、新たな国家を形成する国民としての認識を強めてきた。

現在、連邦憲法の第160条において、マレー人 (Malay) は、イスラームを信仰する者、習慣的にマレー語を話す者、マレーの慣習に準拠する者といった3要素が含まれている者のことを指すと定められている。

マレーシアの首都クアラルンプールを歩けば、様々な服装の人々とすれ違い、エスニックな大衆食堂を目にすることが出来る。マレー系の大衆食堂に足を運べば、ナシ (マレー語で米の意) を中心とした食事を頂くことが出来る。そして、中華系の食堂に立ち寄ると麺料理、インド系の食堂は、カレーやロティ (マレー語でパン系の食事を指す) が存在する。例を挙げると限らないが、マレーシアでは多彩な食事を経験することが出来る。マレー系・中華系・インド系の宗教が異なる中で、ハラール認証ロゴ (認証規格に沿ってハラールであることが認められた製品に付与されるロゴのこと) は、それを頼りに、多民族が共存する工夫の一端であることが確認できる。ちなみに、「ハラール」や「ハラーム」は、アラビア語由来のものであるが、「ハラル」や「ハラム」のような発音は、マレー圏に由来する場合が多い。



ロティチャナイ (薄くのばして焼いたパンのこと) (2023 年 11 月)

ハラールを超えるタイプの味？

現在、「ハラール」の用語のほかに「タイプ」がマレーシアを始めとする、東南アジア地域において多用される傾向にある。イスラーム法の第1の典拠である聖典クルアーンでは、「ハラールでよい〔タイプな〕もの (ḥalālan ṭayyiban) を食べなさい」(食卓〔5〕章 88 節) という形で、2つの語が同義語ないしは類義語として並べられている。一方で、マレーシアなどの東南アジア・イスラーム圏では、両者を分けて「ハラル」(ハラールのマレー語発音)を「合法・適法」、「トイイブ」(同前)を「〔健康や環境に〕よいもの」と分けて解釈するケースも見られる。アラブ圏では今日でも同義語説が有力であり、分けて解釈するのは、東南アジア特有の現象となっている。

多民族国家マレーシアの複雑性を活かしながら、そしてマレー語の持つ独自の文化の中で「ハラール」の味が日々紡がれているのである。

〈プロフィール〉

桐原 翠（きりはら・みどり）

京都府立大学農学食科学部和食文化科学科
講師／立命館大学立命館アジア・日本研究
機構客員研究員。専門は、地域研究・イス
ラーム世界論（ハラール食品産業の研究）。
最近の著書論文に、『現代イスラーム
世界の食事規定とハラール産業の国際化：
マレーシアの発想と牽引力』（ナカニシヤ
出版、2022年）、「ディアスポラ・アフガ
ニスタン知識人とイスラーム：ハーシム・
カマーリーの軌跡と思想」（『イスラーム世界研究』第10巻、2017
年）、「Whose Accountability?: Reflections on Halal Food Production
and Consumption in the Recent Global Islamization” (*Kyoto Bulletin of
Islamic Area Studies*, Vol. 18, pp. 30–43, 2025) など。





ONLINE ISBN 978-4-910550-12-1
PRINT ISBN 978-4-910550-13-8

Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University アジア・日本研究所

